

発掘調査報告第13集

駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営駐場整備事業（昭和56年度分）

埋蔵文化財緊急発掘調査

大久保北遺跡

緊急発掘調査報告書

1982

南信土地改良事務所

駒ヶ根市教育委員会



① 大久保北遺跡A調査区



② 同 B 調査区



③ 同 C 調査区



④ 同 B 調査区溝状造構

序 文

今回ここに刊行の運びとなりました報告書は、竜東地区の県営は場整備事業に伴い、昭和56年度に実施された埋蔵文化財緊急発掘調査の報告であります。

昭和55年度より当駒ヶ根市の地区の中で、天竜川より東の地区—竜東地区におきまして、県営は場整備事業が実施され、昭和56年度より県営は場整備事業に先立ちまして、埋蔵文化財の発掘調査を行わなければならないという現情であります。

今回発掘調査を行いました大久保北遺跡は、竜東東伊那地区に属し、天竜川の河岸段丘上に位置しています。地元では旧来から、屋根瓦の製造が行われ、遺跡地内においても瓦土の採集がなされ、その際に遺物が出土していたと住民の方々からお聞きしていました。当調査の結果、縄文時代の住居跡や遺物、平安時代の住居跡や遺物が数多く発見され、今までに調査された各々の遺跡の資料にまた一つ新資料が加えられました。本報告書の各項にみられます多くの遺構や遺物が、今後の研究に果たす役割は大きいものがあると確信しております。

長期間にわたって発掘調査をご指導下さった友野良一団長を始め、快く発掘作業に参加していただいた地元の方々、事業に深いご理解をいただいた東部土地改良区並びに南信土地改良事務所の方々、地主の方々等、多くの皆さまのご協力、ご厚意によりまして初期の目的を達成することができました。

ここに関係者の皆さま方に心から感謝申し上げますとともに、この報告書が学界のお役に立つことを念願する次第であります。

昭和57年3月20日

駒ヶ根市教育長 木 下 衛

凡 例

1. 今回の調査は、昭和56年度に実施された駒ヶ根東部土地改良区東部地区県営は場整備事業に伴うものである。
2. 事業は、南信土地改良事務所の委託により、県営は場整備事業駒ヶ根東部地区埋蔵文化財調査会が実施したものである。
3. 本報告書は、昭和56年度中に業務を終了する義務があるため、調査によって明らかとなった遺構及び遺物をより多く図示することに重点をおき、文章記述はできる限り簡略し、資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。
4. 本報告書の執筆は、小原亮一が担当した。
5. 遺構関係の図面は、小原と新井美智子が製図し、縮尺はその都度指示してある。
6. 遺物整理作業の中で、土器の復元を小松原義人が担当し、土器の実測を小原・新井美智子・矢沢秀樹が、土器の拓影を増沢健が、石器の実測・製図を新井・田中由佳里・矢沢がそれぞれ分担した。
7. 本報告書の編集は、埋蔵文化財調査会が主としてあたった。
8. 本遺跡の遺物及び実測図類は、市立駒ヶ根博物館に保管してある。
9. 採図中のNaは通し番号であり、本文中の番号と一致する。
10. 遺物の表示については、下記のとおりであり、その外のものについては、指示してある。

● - 繩文中期土器	■ - 凹 石
□ - 打製石斧（及び石錐）	▲ - 石 核
☆ - 磨製石斧	△ - 石鍛及び黒曜石剥片・搔器
■ - 磨り石	○ - 丸 石
□ - 故 高 器	● - 石 錐
△ - 刺片石器	◆ - 石 匙
* - 刺 片	◎ - 棒状石器
○ - 弥生式土器	

目 次

序 文
凡 例
目 次
挿 図 目 次
図 版 目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯	1
第1節 発掘調査に至るまでの経過	1
第2節 調査会の組織	1・2
第3節 発掘作業経過	2・11・12
第Ⅱ章 遺跡の環境	13
第1節 位置及び地形	13
第2節 歴史的環境	13
第Ⅲ章 発掘調査	14
第1節 調査概要	14
第2節 調査A区遺構と遺物	14・17・20・25
第3節 調査B区遺構と遺物	26・28・32・34・39・42・43・46・47・52・58・59
第4節 調査C区遺構と遺物	60
第Ⅳ章まとめ	63・64
第Ⅴ章 出土土器についての考察	64・65

挿 図 目 次

第1図 大久保北遺跡位置図	3
第2図 大久保北遺跡地形図	4
第3図 大久保北遺跡周辺遺跡分布図	5
第4図 昭和55年度試掘調査位置図	6
第5図 大久保北遺跡A～C調査区位置図	7
第6図 大久保北遺跡A・B調査区	8
第7図 大久保北遺跡C調査区	9
第8図 駒ヶ根市付近の地質図	10
第9図 A地区1号住居跡及び第1・2号土壤実測図	15・16
第10図 A地区第1号住居跡床面出土土器実測図及び拓影図	18
第11図 A地区第1号住居跡床面出土石器実測図	19
第12図 A地区第2・3号住居跡実測図	21・22
第13図 A地区第2号住居跡床面出土土器拓影図及び石器実測図	23
第14図 A地区第2号住居跡床面出土石器実測図	24
第15図 A地区第3号住居跡床面出土土器及び石器実測図	25
第16図 B地区第1号住居跡及び第1号集石跡出土遺物分布図	27
第17図 B地区第1号住居跡及び第1号集石跡実跡図	28
第18図 B地区第1号住居跡床面及び第1号集石跡出土土器・石器実測図	29

第19回	B地区第1号集石跡出土石器実測図	30
第20回	B地区第1号集石跡及び42G出土土器・石器実測図	31
第21回	B地区第2号住居跡出土遺物分布図	33
第22回	B地区第2号住居跡実測図	34
第23回	B地区第2号住居跡床上出土土器実測図	35
第24回	B地区第2号住居跡床上出土土器実測図	36
第25回	B地区第2号住居跡床上出土石器実測図	37
第26回	B地区第2号住居跡床上出土石器実測図	38
第27回	B地区第2号住居跡床上出土石器実測図	39
第28回	B地区や-41・42G 7ク土出土石器実測図	40
第29回	B地区第3号住居跡出土遺物分布図	41
第30回	B地区第3号住居跡実測図	42
第31回	B地区第3号住居跡床面出土土器実測図	43
第32回	B地区第3号住居跡床上出土石器実測図	44
第33回	B地区第4号住居跡出土遺物分布図	45
第34回	B地区第4号住居跡実測図	46
第35回	B地区第4号住居跡床面出土土器実測図	48
第36回	B地区第4号住居跡床上出土石器実測図	49
第37回	B地区第4号住居跡床上出土石器実測図	50
第38回	B地区第4号住居跡床上出土石器実測図	51
第39回	B地区第4号住居跡床上出土石器実測図	52
第40回	B地区第2号集石跡実測図及び出土遺物分布図	53
第41回	B地区第2号土壤実測図	54
第42回	B地区第2号集石跡周辺出土土器実測図	54
第43回	B地区第2号集石跡及び周辺出土石器実測図	55
第44回	B地区第2号集石跡周辺出土石器実測図	56
第45回	B地区第2号集石跡周辺出土石器実測図	57
第46回	B地区第1号・3号・4号土壤実測図及び出土遺物分布図	58
第47回	B地区溝状遺構実測図及び出土遺物分布図	59
第48回	B地区溝状遺構下層出土石器実測図	60
第49回	C地区第1号住居跡実測図	61
第50回	C地区第1号住居跡床面出土遺物実測図	61
第51回	大久保北遺跡出土土器及び周辺遺跡出土土器相関図	66

図 版 目 次

- 図版1 調査A区調査前全景、第1～3号住、土壤1・2号、埋甕遺物出土状態及び復元土器
 図版2 調査B区全景、第1・2号住、第1号集石跡、遺物出土状態、復元土器
 図版3 調査B区第2号住、遺物出土状態、復元土器
 図版4 調査B区第3・4号住、遺物出土状態、4号住炉跡、復元土器
 図版5 調査B区土壤1・2号、溝状遺構、出土土器、発掘参加者、調査C区第1号住
 主要右器一覧表

第一章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

駒ヶ根市東伊那大久保に位置する大久保北遺跡が駒ヶ根市東部土地改良区東部地区県営は場整備事業の一部に入るとのことで、昭和55年9月10日に、長野県教育委員会、南信土地改良事務所、駒ヶ根市教育委員会の出席のもとで、現地協議をした結果、記録保存を行うということで駒ヶ根市が担当して発掘調査を行うこととなった。

発掘調査に先立ち、昭和55年10月21日～24日までの4日間、大久保北遺跡の遺跡範囲確認の為12ヶ所のグリッドを設定し試掘調査を実施した。この結果、当初遺跡地の主体と考えられていた場所には遺物包含層が少なく、南方へ100mの地点を中心に包含層の拡がりがあることを確認した。（第4図参照）

昭和56年5月に、南信土地改良事務所から発掘調査の依頼があり、5月22日に南信土地改良事務所長と市長との間に委託契約を結び、つづいて市長と遺跡調査会会长との間に再委託契約を締結した。調査は県営は場整備事業駒ヶ根下間地区埋蔵文化財調査会が行うこととし、調査團を編成し、團長には友野良一氏をお願いし、調査の準備に入った。

第2節 調査会の組織

●県営は場整備事業駒ヶ根東部地区埋蔵文化財調査会

会長	木下	衛	(駒ヶ根市教育長)
理事	小池	金義	(〃 教育次長)
〃	宮藤	昌三	(〃 文化財審議委員)
〃	松村	義也	(〃 ")
〃	竹村	進	(〃 ")
〃	増沢	広人	(市立駒ヶ根博物館長)
監事	中原	正純	(市文化財保存会会长)
〃	北原	名田造	(駒ヶ根郷土研究会会长)
幹事	北沢	吉三	(市教育委員会社会教育係長)
〃	原	寛恒	(〃 社会教育係)
〃	福沢	房美	(市立駒ヶ根博物館)
〃	小原	晃一	(〃 ")

●調査団

团长 友野 良一（日本考古学协会会员） <発掘担当者>

調査員 小原 晃一（長野県考古学会会員） < " >

" 小松原 義人（ " ）

調査補助員 東野 広次

" 白鳥 あき子

指導者 関 孝一（長野県教育委員会指導主事）

臼田 武正（ " ）

郷道 哲章（ " ）

樋口 昇一（ " 専門主事）

岩佐 今朝人（ " ）

筆沢 浩（ " ）

小林 秀夫（ " ）

青沼 博之（ " ）

小柳 義男（ " ）

百瀬 新治（ " ）

土屋 積（ " ）

百瀬 長秀（ " ）

林 茂樹（日本考古学协会会员） （順不同、敬称略）

第3節 発掘作業経過

●発掘作業日誌

7月1日（水） 現場に発掘作業の打ち合せを行う。友野团长より当遺跡の概略説明を受ける。

調査区域の中へ、南北軸に沿って、1・6・11・16～、東西軸に、あ・か・さ・た～の10m×10mの主グイを設定し、その間に2m×2mのグリットを設けた。調査区を南より、B・A・C区とした。その外の作業は、現場草刈りと、テントの設営を行う。

7月2～4日（木～土） 雨天の為、現場作業中止。

7月5日（日） 調査A区周辺の地形測量と現場草刈り作業を行う。

7月6日（月） 調査A区周辺の地形測量と調査A区とB区の間のグリット掘り下げ作業を行う。調査A区をブルドーザーで耕土を排土する。

7月7日（火） 調査B区周辺の地形測量とグリット掘り下げ作業。調査A区の主グイ打直し作業を行う。

7月8日（水） 調査B区周辺の地形測量と調査A区の2m×2mのグリット設定。B区のグ



第1図 大久保北遺跡位置図 ($S = \frac{1}{200,000}$)

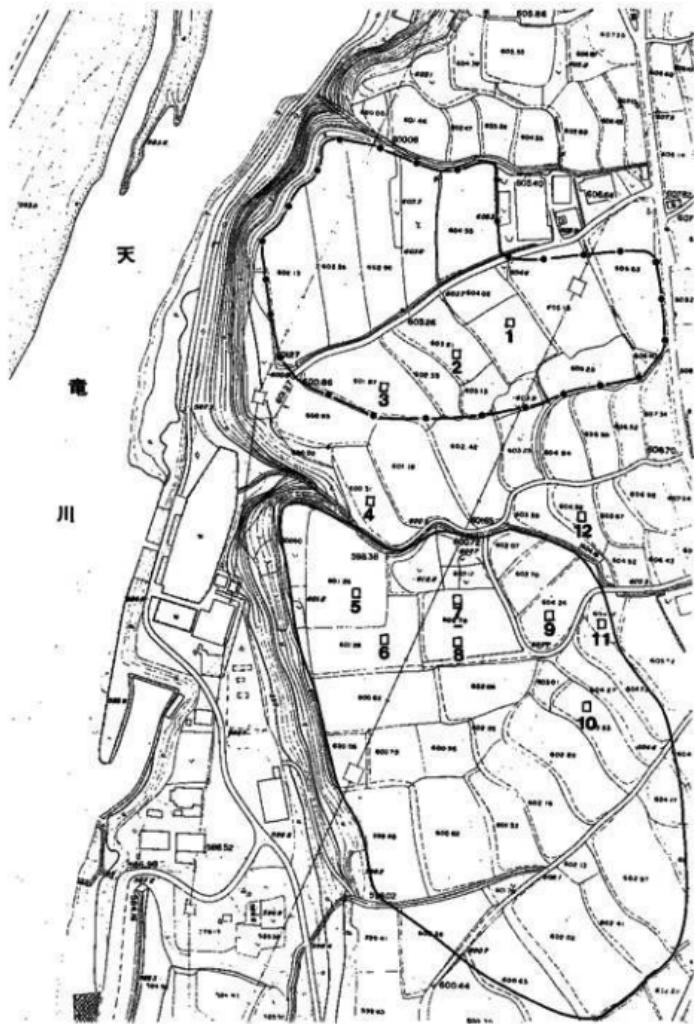


第2図 大久保北遺跡地形図 ($S = \frac{1}{2,000}$)

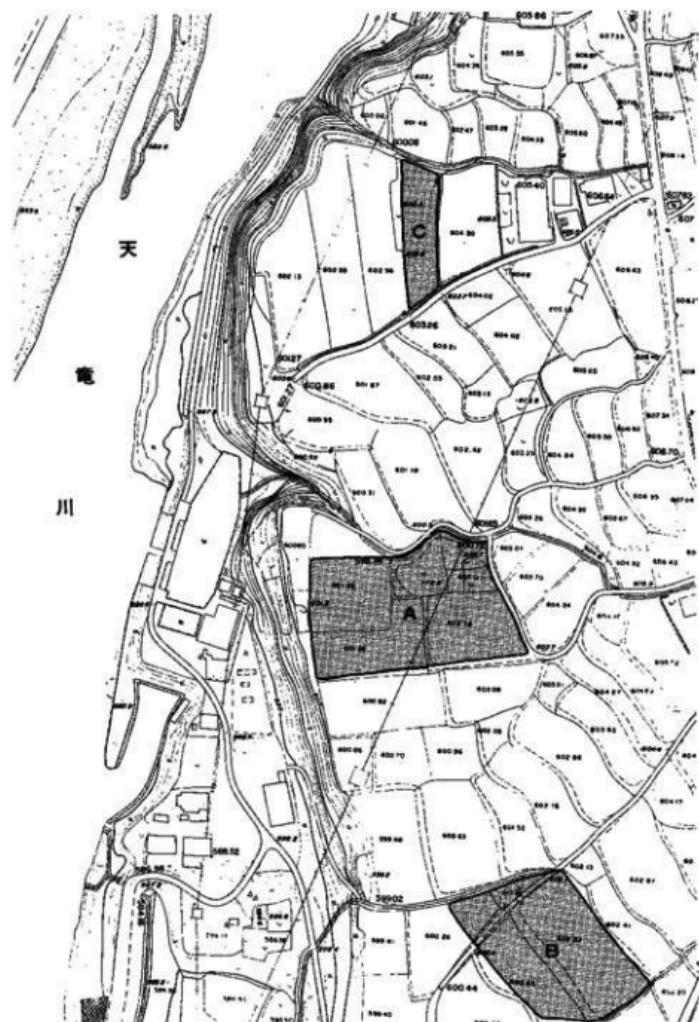


1.大久保北 2.大久保 3.箱塁 4.堀外上 5.大久保城跡 6.高田城跡 7.反目

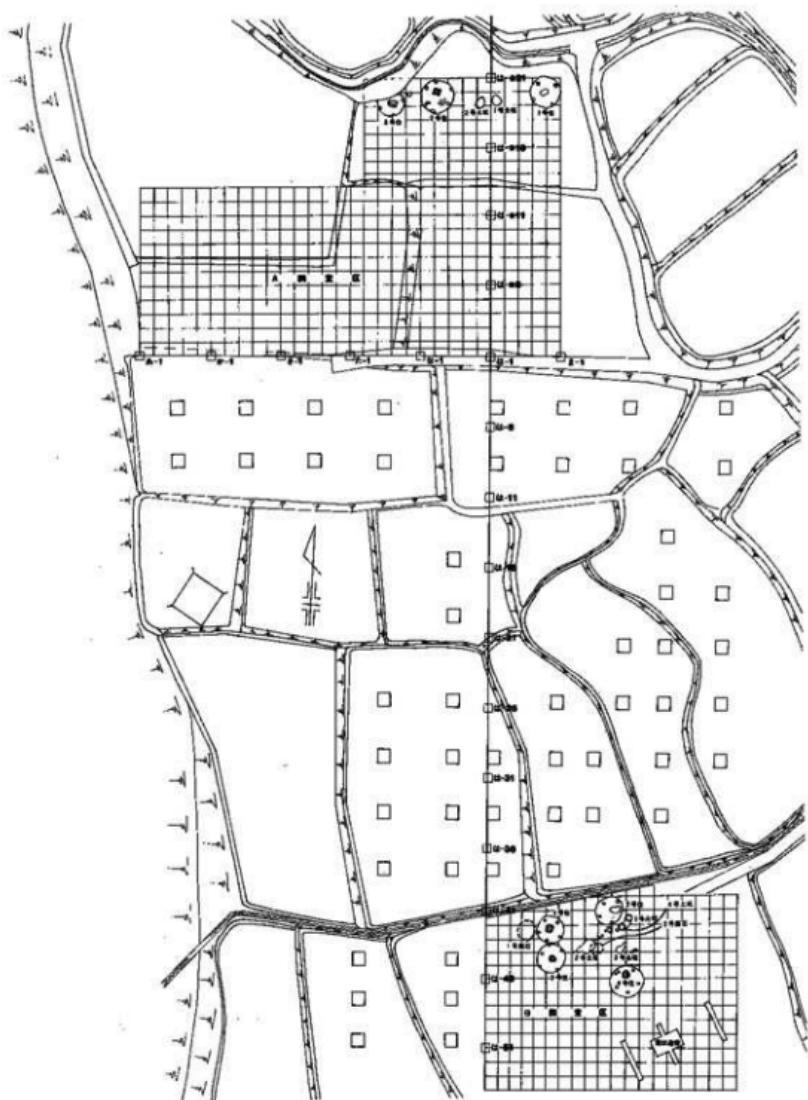
第3図 大久保北遺跡周辺遺跡分布図 ($S = \frac{1}{10,000}$)



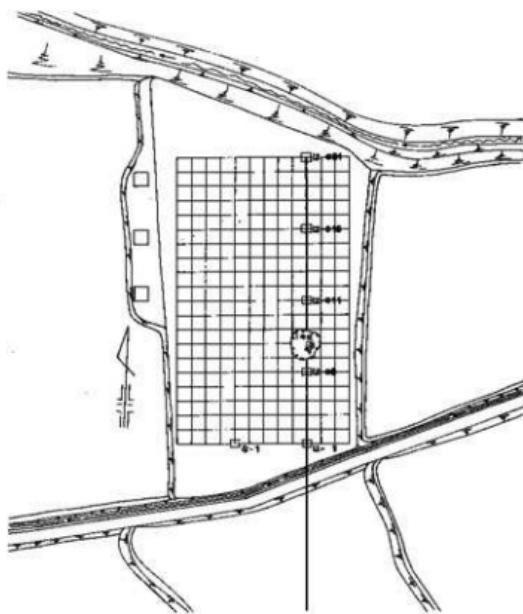
第4図 昭和55年度試験調査位置図 (S = $\frac{1}{2,000}$)



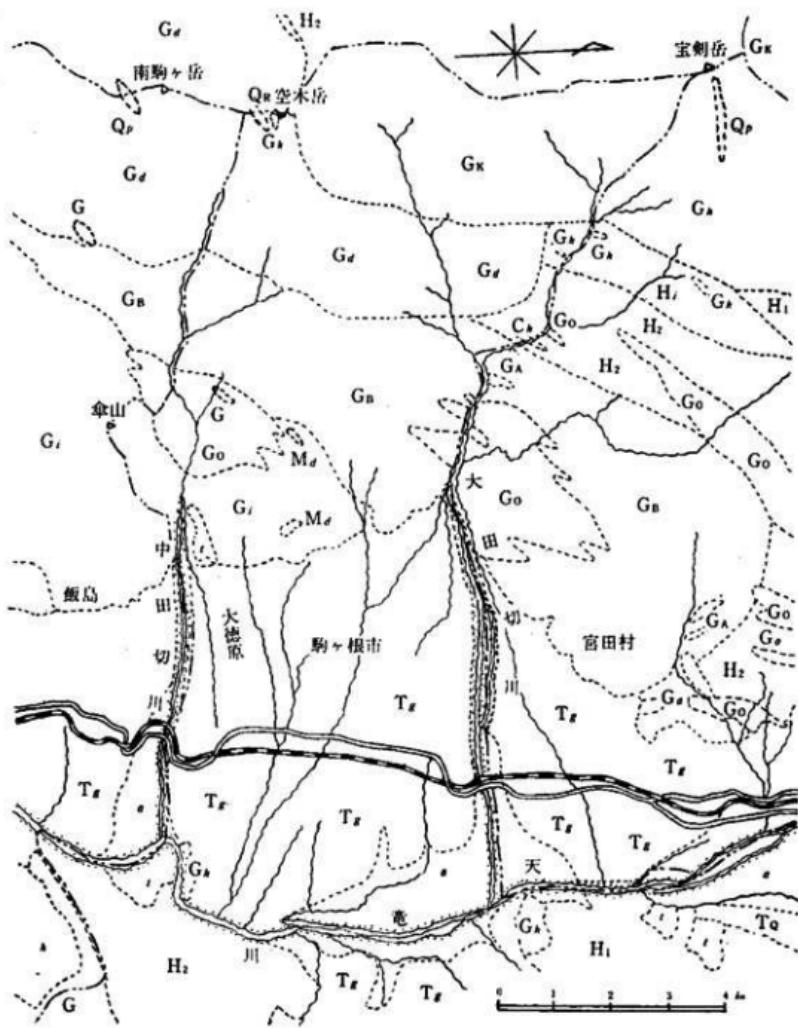
第5図 大久保北造跡 A～C調査区位置図 ($S = \frac{1}{2,000}$)



第6図 大久保北道跡 A・B 調査区 ($S = \frac{1}{400}$)



第7図 大久保北遺跡C調査区 ($S = \frac{1}{400}$)



Q_p 石英玢岩～石英斑岩, G_x 中粒花崗閃綠岩, G_d 亂状花崗閃綠岩, G コートランド岩～はんれい岩, G 織状片麻岩帶, G_t 中粒～細粒黑雲母花崗岩, G_s 細粒黑雲母花崗岩, H₁ 片状ホルンフェルス帶Ⅰ, H₂ 片状ホルンフェルス帶Ⅱ, G_a 中粒黑雲母花崗閃綠岩, a_x 蘭および粘土, T_x 蘭, 砂, および粘土, G_d 中粒片状花崗閃綠岩, G_x 中粒花崗閃綠岩

第8図 駒ヶ根市付近の地質図 ($S = 1/100,000$)

リットの表土はね作業。

7月9日（木） B区まー41～46グリットを掘り下げ、まー41～46に南北のベルト、はー42～むー42に東西のベルトを設定する。まー42グリットより石画の炉が検出される。B地区第1号住居跡とする。なお、この炉より南西4m位の覆土下層より、弥生時代の磨製石庖丁の破片が出土する。

7月10日（金） 第1号住居跡の出土遺物の平板測量及びレベルの実測。清掃後、写真撮影。南北・東西のベルトの断面の清掃。午後より一部A地区へ移り、かー1～5からさー1～5の表土掘り下げを行う。なお、B区をブルドーザーで耕土を排土する。2号住出土遺物取り上げ。

7月11日（土） A区かー1～10、さー1～10、たー1～10、かーたー6へベルト設定。ベルト内の掘り下げ。B区2号住掘り下げ。C区をブルドーザーで耕土を排土する。

7月13日（月） C区を全面的に掘り下げる。耕作時に、かなりの擾乱を受けている。C区は-C6～C11より灰釉陶器と土師器出土。B区2号住出土遺物の平板測量を行う。

7月14日（火） B区の西側の一段低い所を拡張して掘り下げるも遺構はない。若干の縄文中期土器片と石器を発見する。B・C区の主グイの打直し作業。ら～りー51グリットの周りに帯状（東西方向）の遺構あり。B区南側のは-47～むー47～51を中心として耕土作業。B区の覆土中の出土遺物を平板・レベル測量。C区遺物表採。

7月15日（水） B区2号住掘り下げ。出土遺物を平板・レベル実測。3号住掘り下げる。

7月16日（木） B区1号住の遺物実測と床面調査。主柱穴は5本で、壁面は耕作により削り取られ、浅く、西壁の方がやや残存状態が良い。2号住・3号住掘り下げる。

7月17日（金） B区1号住の柱穴掘り下げ。床面の清掃及び写真撮影。みー43グリット覆土中より棒状石器出土。2号住・3号住掘り下げ。出土遺物の実測。

7月18日（土） A区西側部分の出土遺物の実測。B区1号住炉の断面実測。2号住の炉石（焼成されて遺存）を残して、平板・レベル実測を行う。3号住の掘り下げ・拡張。

7月20日（月） C区の1号住掘り下げ。住居跡の出土遺物（土師、灰釉、磨り石等）を実測し、住居跡の断面を測る。B区3号住掘り下げ。

7月21日（火） C区調査完了。B区2号住の南北・東西のベルト実測。2号住出土遺物取り上げ。A区1・2号住掘り下げ。

7月23日（木） A区1号住掘り下げ。住居跡中心部より埋甕が東西に並んで2個体出土。1号住には、炉跡が見当らない。2号住の掘り下げ。炉は、方形でしっかりしている。B区3号住ベルトを残して掘り下げ。出土遺物の実測及び写真撮影。

7月24日（金） B区1号住炉の断面実測。焼土は、炉口より40cm下の層に集中して出土。2号住東の1号土壙の掘り下げ。1号住調査終了。

7月25日（土） B区2号住の住居跡床面のレベル・断面実測。2号住の炉の石は抜かれ、周

辺に遺存し、焼土は炉底より検出される。3・4号住掘り下げ。出土遺物の実測。A区2号住のベルト設定、掘り下げ。

7月27日（月） A区2号住の炉石の実測。B区2・3号土壌と4号住の掘り下げ。3号住出土遺物の実測。溝状遺構と両側のトレーンチ掘り下げ。

7月28日（火） A区1号住測量。2号住出土遺物実測。3号住掘り下げ。B区3・4号住居跡掘り下げ。出土遺物実測。3・4号住ベルト清掃、溝状遺構掘り下げ。

7月29日（水） B区溝状遺構の疊群、出土遺物実測。3・4号住ベルト実測、写真撮影。溝状遺構下層よりと石や磨り石出土。A区2号住・3号住掘り下げ。

7月30日（木） B区溝状遺構の断面（南北1ヶ所、東西1ヶ所）の実測。3号住居跡の断面・レベル実測。2号集石跡の出土遺物の実測。写真撮影。

7月31日（金） B区3号住の調査終了。2号集石跡の石の実測を行う。溝状遺構の南北（東西）の断面の実測。

8月1日（土） B区1～3号土壌の平板測量と写真撮影。A区1号住の埋甕掘り出し作業を行う。西側の埋甕は、2個体が重なり合っている。第1・2号土壌の掘り下げを行う。

8月3日（月） A区1号住埋甕掘り出し作業終了。土器内の堆積土を分析資料として取り上げる。1・2号土壌の断面実測。写真撮影後、掘り下げ。

8月4日（火） A区西側の覆土出土の土器の残りを実測。B区4号住の出土遺物の取り上げを行う。

8月5日（水） B区4号住の実測とレベルの測量。第1・2・3号土壌の実測及びレベルの測量。写真撮影。

8月6日（木） A区1～4号住、溝状遺構、土壌1～3号の全面測量を行う。全景写真の撮影を行う。

8月7日（金） A区2号住、B区1号住の炉石（将来復元する為）の10分の1の実測を行い石を取り上げる。なお、炉石の高さを局部的に測る。本日にて、当遺跡の発掘調査を全て終了した。

〔発掘調査参加者名簿〕

武藤正太郎、大沼数廣、羽場しなよ、大沼さかゑ、大沼みよ、中村文夫、中村宗雄、大沼宗吉、大沼傳衛、大沼婦さ恵、杉本二郎、田中由佳里、米山直子、田中広和

〔協力者〕 大沼政美

4週間余にわたって、真夏の暑さの中で、発掘調査に参加・協力していただいた方々に、心から感謝の意を申し上げる次第です。本当にありがとうございました。 (小原晃一)

第II章 遺跡の環境

第1節 位置及び地形（第1・2・8図参照）

当遺跡は、駒ヶ根市東伊那大久保6500～6630に所在する。国鉄飯田線太田切駅より北東へ2.5kmに位置し、標高は600m前後である。

駒ヶ根市は三つの地区に分けられ、天竜川をはさんで西側に赤穂地区、東側の南部分に中沢地区、北部分に東伊那地区があり、その東伊那地区的北端に当遺跡は位置し、さらに北は、伊那市東春近と接し、天竜川をはさんで西は、宮田村と接する。天竜川との比高差は、20mを測る。

伊那谷は、長野県の南部にあり、西に木曾山脈（中央アルプス）があり、東に赤石山脈（南アルプス）、中央構造線をはさんで、戸倉山、高鳥谷山を始めとする前山の伊那山脈が並行して南北に走っている。この伊那山脈の一角をなす高鳥谷山の連山となる西山麓に遺跡は立地する。

この山麓より流れでる小河川と天竜川の河岸段丘上（左岸）という恵まれた自然環境により、遺跡は営まれている。

当遺跡周辺の地質は、天竜川両岸の礫・砂層を主とし、中粒片状花崗閃緑岩、片状ホルンフェルス帶Iが、基盤をなしている。（第8図参照）

当遺跡の層位は、開田時にによる土層の移動と、砂質粘土層が前記の基盤の間に存在しているため、瓦製造にその土が用いられ削土されてきたことにより、ノーマルな状態を示していない。耕作土（表土一暗褐色土）を第I層として、以下に示すとおりである。

第I層——耕作土（表土一暗褐色土）

第II層——地場土（暗黄褐色土）

第III層——茶褐色土（木炭粒含む）

第IV層——暗茶褐色土（ローム粒・木炭粒含む）

第IV'層——茶褐色土+黒色土の混土層（〃）

第V層——黒褐色土（ローム粒・焼土若干含む）

第VI層——粘性砂質ローム層

第2節 歴史的環境（第3図参照）

東伊那地区には、古くから、弥生時代の遺跡や中世の城跡が存在する所として知られている。

第3図のように、当遺跡周辺は天竜川左岸段丘上に位置し、山麓から流れでる河川の扇状地上に遺跡は分布しています。1は大久保北遺跡（縄文時代中期、弥生時代、平安時代）、2は大久保遺跡（奈良～平安時代以降）、3は箱根遺跡（墓地、応永の宝慶印塔）、4は垣外上遺跡（弥生時代）、5は大久保城跡（中世）、6は高田城跡（中世）、7は反目遺跡（縄文時代中期）であり、大久保橋の東には、高遠藩木材改番所のち尾張藩見附番所が存在している。

第III章 発掘調査

第1節 調査概要（第4・5図参照）

昭和55年秋に、事前調査として試掘調査を行い、第4図のように、~~一二二二二~~の範囲が当初の遺跡地と考えられていたが、調査の結果、小河川をはさんで南側の台地上にも遺跡が存在する事が確認された。（第4図参照）

調査方法は、発掘調査に先立ち、全体的に試掘グリットを入れ、土層、遺物の包含状態、遺構の存在を確認しながら、第5図のようにA・B・Cの三つの調査区に分けて行った。前章でも述べたが、A区とC区、A区とB区の間には、遺構の存在が充分考えられたが、基盤が粘質砂質ローム層であり、屋根瓦の原材料として削土されており、遺構もその時点で消滅したものと考えるに至った。

調査は、グリット方式により、遺物包含層、遺構の確認を持って拡張するという方法をとった。グリットは、A調査区の両端を基点に、東西方向へ、あ・か・さ・た・な～とし、は-1Gを基点として、南方へ、1・6・11・16、北方向へ、a6・a11・a16・a21とし、C調査区は、は-C1～C21までを設定した。この10m×10mの主グリットの中に、2m×2mの小グリットを設けた。

出土遺物については、第I・II層は、グリットごとにまとめて取り上げ、III層以下は、全点面上へドット（出土位置をおさえる）し、レベル（出土した標高値）を実測した。

この調査により、縄文時代中期後半の堅穴住居跡7軒、同時代の土壙6基、集石跡2ヶ所、平安時代以降の住居跡1軒、時代不明の溝状遺構が1ヶ所確認され、出土遺物は、総数で850点に及んだ。

第2節 調査A区遺構と遺物（第6・9～15図、図版Ⅰ）

調査区をA・B・Cの3区に分けたので、A調査区から順に記述して行きます。

第1号住居跡（第6・9～11図、図版Ⅰ）

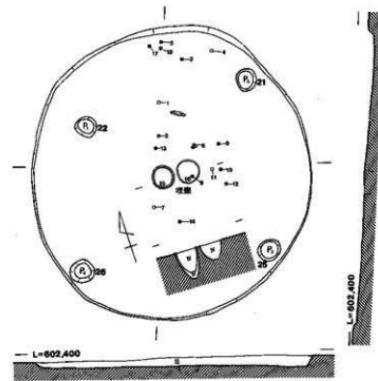
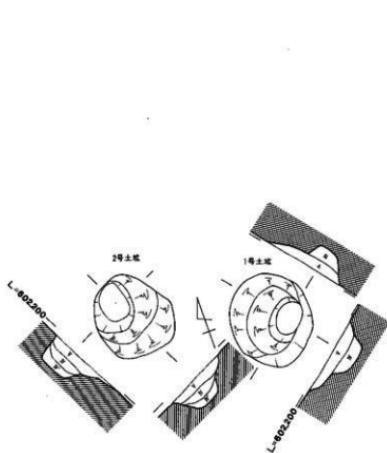
遺構（第9図、図版Ⅰ）

本住居跡は、遺跡地のほぼ中央に位置し、西方約4m～7mに第1・2号土壙が存在する。覆土（住居跡堆積土）は、Ⅲ層が埋まり、掘り込みは、粘性砂質ローム面になされている。

プランは、南北4m35cm、東西4m20cmのほぼ円形を呈し、深さは10～15cmを測る。

柱穴は、P₁～P₄の4本が確認され、深さは21～26cmと割合浅い。

炉跡は検出されず、床面中央に東西位に並列して埋甕が2ヶ所設けられており、No.15・16がそれにあたり、No.15は2個体が重複して埋められていた。



第9図 A地区第1号住居跡及び第1・2号土塀実測図 ($S = \frac{1}{10}$)

床面は、堅致でほぼ平坦を呈し、小さなピット類は検出されず、また焼土・木炭・炭なども遺存していなかった。

遺物（第10・11図、図版1）

本住居跡より出土した遺物は少なく、合計19点のみである。耕作時に、住居跡の大半の遺物が天地がえしきれたものと考えられる。

繩文中期土器の深鉢形が多く、埋甕を含めて9点、石器では、打製石斧が4点で短冊形が3点、撥形が1点、その外は磨り石2点、剥片が4点である。

第10図中の8・9・10は、深鉢形土器の口縁部（8・9）、胴部（10）片であり、8は横走する隆帯を貼り付け、その間にヘラ先で刻み目を施す。明褐色を呈し、長石・石英を多く含む。9は口縁から垂下する隆帯と頸部上端を横走する隆帯で区画がなされ、その間を半截竹管で連続押し引き文を施す。明灰褐色を呈し、長石・石英を多く含む。10は肩下半部片で無文であり、長石・石英を多く含む。裏面は、なで整形で、おこげが付着している。

埋甕は、前述のとおり、2ヶ所ありNo15は二重で、No16は一個体である。15—内側の土器は、高さ37.6cm、最大胴径32.8cm、底径10.4cm、器壁厚は9~11mmを測る。茶褐色を呈し、長石・石英を多く含む。器面をなで整形し、2条の唐草文の隆帯と蛇行隆帯を4単位貼り付け、ヘラ先で斜条線・綾杉状文を施している。15—外側の土器は、高さ45cm、最大胴径36cm、底径9.4cm、器壁厚は9~10mmを測る。入組んだ唐草文を隆帯で構成し、ヘラ先で斜条線を施している。16は、底部穿孔の埋甕で、15同様正位である。高さ27.5cm、最大胴径35.2cm、底径10.2cm、器壁厚は6~10mmを測る。明褐色を呈し、長石・石英が非常に多く含まれている。2条の隆帯懸垂文を8単位貼り付け、その間に縱の波線をつけ、ヘラ先で綾杉状文を施している。

8・9は、唐草文系I（註1）の末に位置し、15—内・外、16は唐草文系IIに比定でき、繩文時代中期後半のものである。

第1号土塙（第9図、図版1）

1号土塙は、2号土塙と東西位に並列している。プランは、段をもった楕円形を呈し、深さは中段まで15cm、底面まで35cmを測る。V—I層と堆積しており、両層とも木炭・ローム粒を含む出土遺物はない。

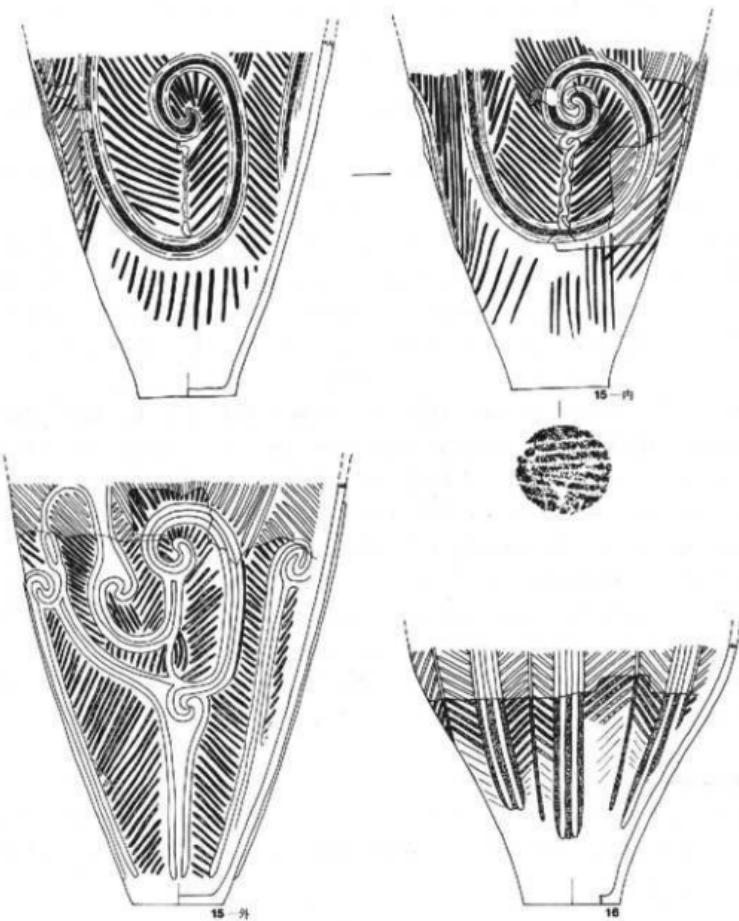
第2号土塙（第9図、図版1）

プランは、1号土塙と同様に、段をもった楕円形を呈し、深さは中段まで20cm、床面まで42cmを測る。V—I—I'層と堆積しており、木炭・ローム粒を含む。出土遺物はない。

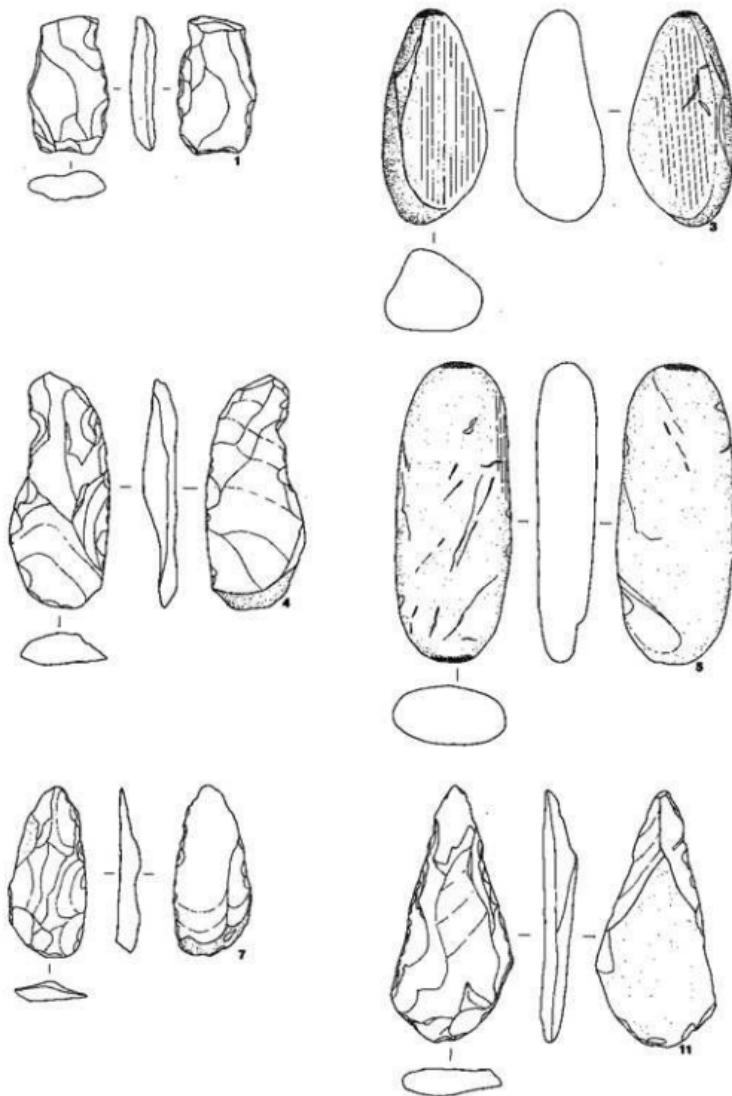
第2号住居跡（第12図、図版1）

造構

本住居跡は、1号住の西方10mにあり、3号住との間に位置する。覆土は、III層が主体でIV'層



第10図 A地区第1号住居跡床面出土土器実測図及び拓影図
(15-内・外、16は古・外は $\frac{1}{2}$)



第11図 A地区第1号住居跡床面出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

も堆積している。掘り込みは、1号住同様、粘性砂質ローム面になされ、遺存部分の壁は浅い。

プランは、南北4m・55cm、東西4m・60cmで、ほぼ円形を呈する。壁高は、10cm内外である。

柱穴は、6本確認され、P₁～P₆で24～46cmの深さを測る。

炉は盤状の粘板岩を使用しており、1m・10cm×1mの大型の炉で、下層より焼土・25cm位、焼土+IV層の混土が20cm前後、焼土+V層の混土が10～20cmの深さで堆積している。

床面はほぼ平担で堅致であり、南西壁寄りの床面に石皿と盤状の石が2個遺存し、東南壁寄りに同じ盤状の石と石柱とも考えられる棒状の石と木炭・焼土が集中している。

遺物（第12・13・14図、図版1）

出土遺物は少なく、特に土器が少ない。それに比して石器が多く出土している。土器は、縄文中期深鉢形土器の破片で6点、石器は、31点で、打製石斧短骨形が7点、撥形が1点、石鎌が1点、石錐1点、凹石1点、石皿1点、磨り石7点、搔器1点、剝片（硬砂岩）5点、黒曜石剥片6点出土している。なお、覆土中より天目茶碗の破片が1点出土している。

第13図中の24は、縄文中期深鉢形土器の胴部片で、2条の横走隆帯と縱位の2条の隆帯を貼り付けて区画し、隆帯間や胴部にヘラ先で条線を施している。明褐色を呈し、荒い長石と細い石英を含む。28と34は同一個体であり、胴部片で人体文の退化した隆帯の貼り付けが行われ半截竹管で縦位の沈線が施されている。長石・石英・金雲母を多く含む。36は、隆帯による唐草文を付け、その間にヘラ先で条線を施す。茶褐色を呈し、石英・長石・金雲母を含む。裏面は、横位のなでを行い、おこげが少し付着している。49は、34同様に人体文の退化した隆帯の貼り付けを行い、半截竹管で、縦・横位の平行沈線文を施している。明褐色を呈し、長石・石英を含む。

No28・34・39は、曾利I式に比定でき、36は、唐草文系I～IIに比定できる。

石器は、第13・14図を参照していただきたいが、特に、20・31・87・88は、ススケている点が注意される。

第3号住居跡（第12・15図、図版1）

遺構（第12図、図版1）

本住居跡は、2号住の西側2m・50cmにあり、北側は、小河川への傾斜地となっているために、北壁部分は遺存していない。覆土は、III-V'が堆積し、木炭とローム粒を含む。掘り込みは、1・2号住同様浅く、粘質砂質ローム面に設けられている。

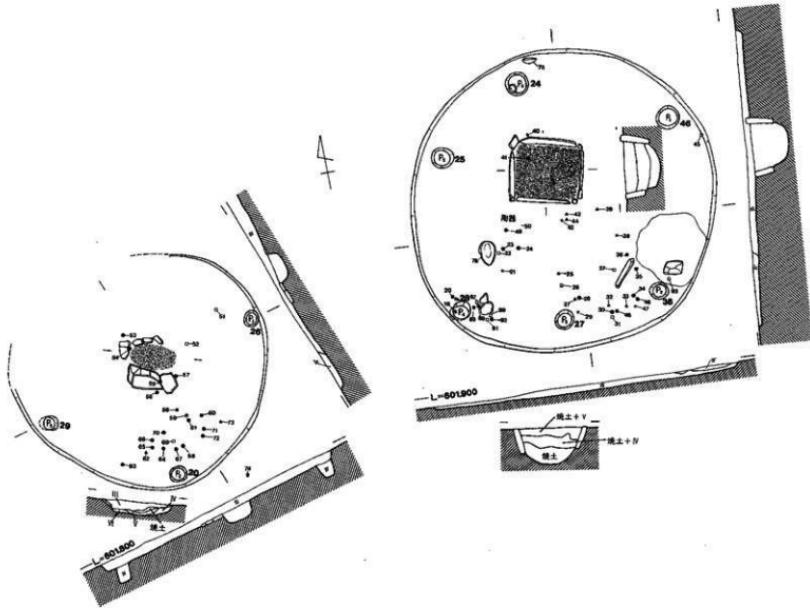
プランは、南北ほぼ3m・60cm、東西3m・85cmで、ほぼ円形を呈し、壁は15～20cmを測る。

柱穴は、3本確認され、1本は遺存せず、深さ20～29cmを測る。小穴はない。

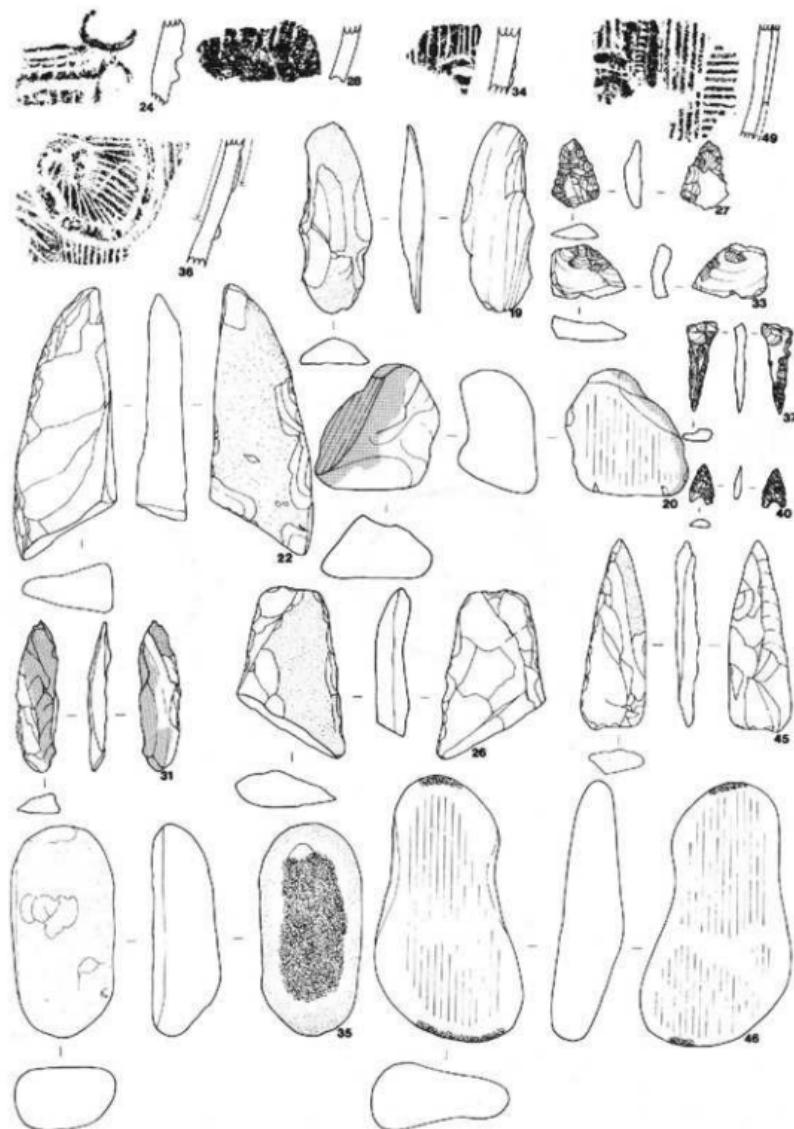
炉は、2号住同様に粘板岩の盤状のものを用いてはいるが、炉形は明確でない。炉内は、下層より、V層-5～7cm、IV層-7～10cm、焼土-5cm前後、III層（焼土・木炭含む）-15cm前後堆積している。

床面は堅致で平担ではあるが、北壁に向って傾斜している。

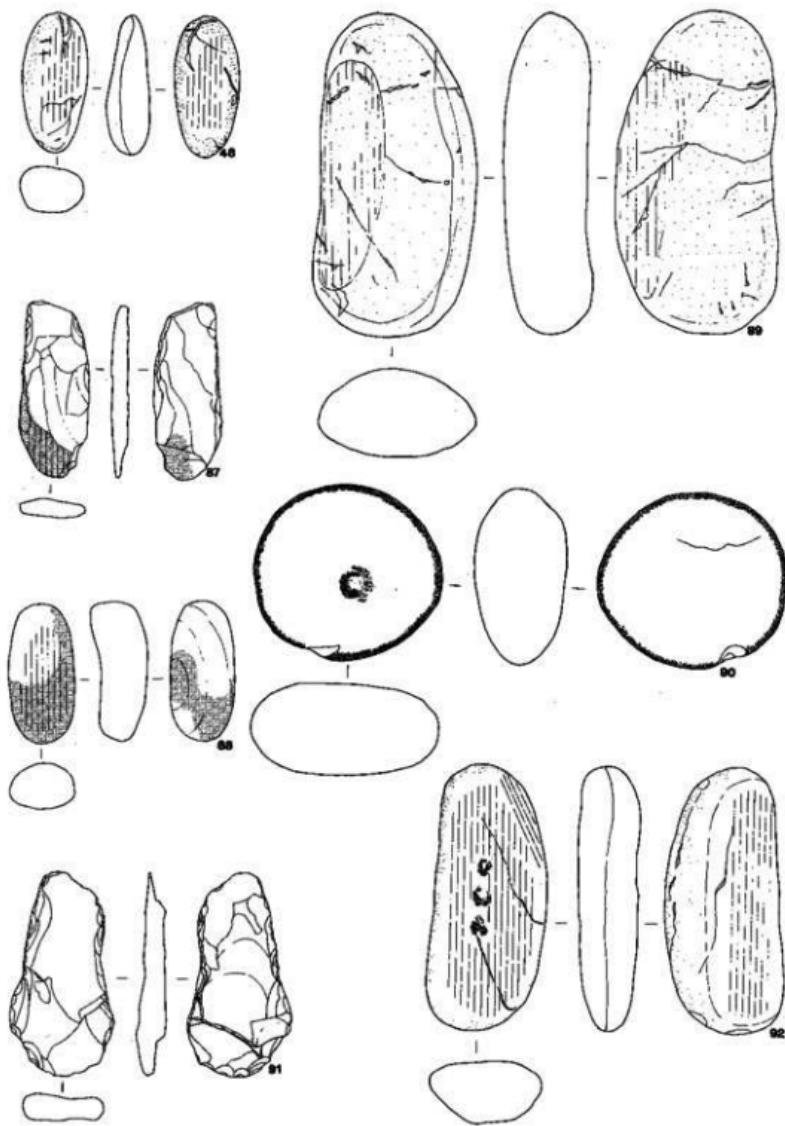
炉石は特に抜かれた痕跡はないので、当初からこのような形態であったとも考えられる。



第12图 A地区第2·3号住居跡実測図 (S=戸)



第13図 A地区第2号住居跡床面出土土器拓影図及び石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



第14圖 A 地區第2號住居跡床面出土石器實測圖 ($S = \frac{1}{2}$)



第15図 A地区第3号住居跡床面出土土器及び石器実測図 (60は外は $\frac{1}{2}$)

遺物（第12・15図、図版1）

出土遺物はわずか23点出土しているだけである。縄文中期土器片16点、打製石斧3点、黒曜石剥片2点、磨り石1点、剝片1点である。第15図中60は、深鉢形土器で高さ29.6cm、口径27.4cm、底径約8.2cm、最大胴径19cmである。隆帯を口縁部に貼り付け、楕円形の区画を行ひヘラ先で条線をひき、胴部にもヘラ先で入組文と沈線を施し地文は条線である。53・63(曾利I未)は人体文の退化した隆帯の付くものであり64は底部で木葉痕71は綾杉文が施される。60・71は唐草文系II。

第3節 調査B区遺構と遺物（第6・16～48図、図版2～5）

第1号住居跡（第6・16～20図、図版2）

遺構（第17図、図版2）

本住居跡は、遺跡地の南部分に位置し、すぐ南に第3号住、東方約2.5mの所に第2号住が存在する。覆土はII～III～V層が堆積し、掘り込みはA地区同様に粘性砂質ローム面になされている。プランは南北3m90cm、東西3m70cmの円形～楕円形の中間の形を呈し、深さは25～45cmを測る。

柱穴はP₁～P₅の5本が想定され、深さは26～50とばらつきがある。

炉跡は床面北西壁寄りに位置し、95cm×105cmを測り住居跡の形に似る。石は整状の厚さ5cm前後の粘板岩を用いている。炉内は焼土～IV～V層の順に堆積し、焼土～10cm前後、IV層～15cm前後、V層～25cm前後を測る。

柱穴や炉の周りに15～20cm前後の小穴が掘られており支柱穴や内部構造における補助的性格(棚や入口等の設備)を示唆するものかもしれない。

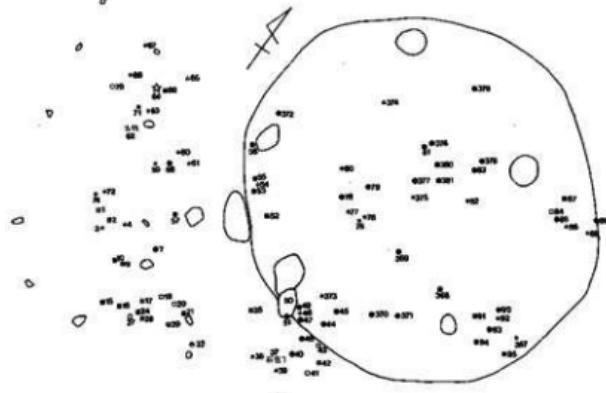
床面は堅致で平坦であり、東壁側は深く、西壁側は浅い。

遺物（第16・18・19図、図版2）

出土した遺物は46点で、縄文中期土器24点、打製石斧1点、磨り石6点、剥片石器1点、制片13点、小石1点である。

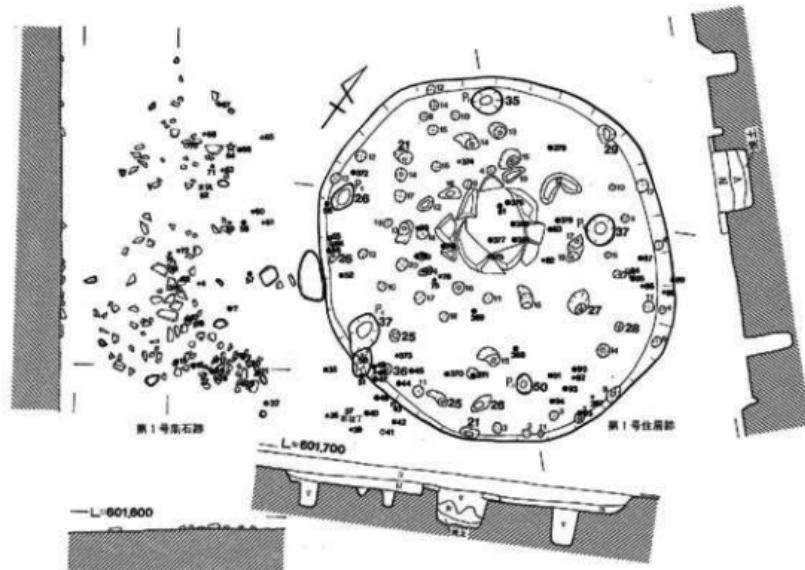
第18図中56・81・83は覆土上層より、377・381、378、383は、床面より出土している。56は深鉢形土器の口縁部片で粘土ひもを蛇身状に貼り付け半截竹管で連続刺突文を施している。淡黄褐色を呈し、石英・長石・黒雲母を含む。81は胴部片で半截竹管で縦位の条線をつけその上に、半截竹管の背で入組文を施している。灰褐色を呈し、黒雲母・石英・長石を多く含む。83は口縁部片で外傾し口縁に沿ってヘラ先で刺突文を連続してつけ、頭部にかけてヘラ状施文具の背で入組文を施している。淡褐色を呈し、石英・長石・黒雲母を多く含む。378は底部を欠く深鉢形土器で、口縫部がやや張り出し胴部より下は割合細身である。頭部には横走する蛇行の隆帯を貼り付け、胴部には4単位の人体文の退化した隆帯の貼り付けを垂下させている。地文は幅の広い半截竹管文を口縁部から胴部にかけて施している。現高24cm、口径16.6cm、最大胴径15.4cm、器壁厚6～10mmを測る。淡黄褐色を呈し、長石・石英・黒雲母を多く含む。377・381は胴部片で無筋斜縄文が施されている。裏面は横なで整形でおこげ付着している。淡黄褐色を呈し石英・長石・金雲母を含む。383は深鉢形土器で底部を穿孔してある。高さ20.4cm、胴径13.6cm、胴径12.8cm、底径6.1cm、器壁厚は6～10mmを測る。地文は単節の斜縄文で、口縁から頭部にかけて3条の横走沈線文と1条の蛇行沈線文をつけ胴下半部には6単位の2条の縦位の蛇行沈線文を垂下させている。淡褐色を呈し、長石・石英・雲母を多く含む。

56・378は曾利II式系に比定でき、81・83は唐草文系IIに比定でき、378・381、383は加曾利E式系の影響を受けた上伊那型の土器と言える。石器は第18・19図を参照されたい。



●—土器 □—打製石斧 ■—磨り石 □—敲打器 △—剥片石器 *—剥片
 ☆—磨製石斧 ○—丸石

第16図 B地区第1号住居跡及び第1号石塚跡出土遺物分布図 (S = 100)



第17図 B地区第1号住居跡及び第1号集石跡実測図 ($S = \frac{1}{10}$)

第1号集石跡（第6・16・17・19・20図、図版3）

遺構（第6・17図、図版3）

第1号住居跡の南西方向1.5mの所にあり、集石の広がりは、南北3m60cm、東西2mの範囲である。集石となっている石の質は、硬砂岩が多く砂岩、花崗岩も含まれている。

集石跡と1号住の間に、盤状の石（50cm×25cm）が置かれており、集石跡と1号住との有機的関係を示唆するものとも考えられる。

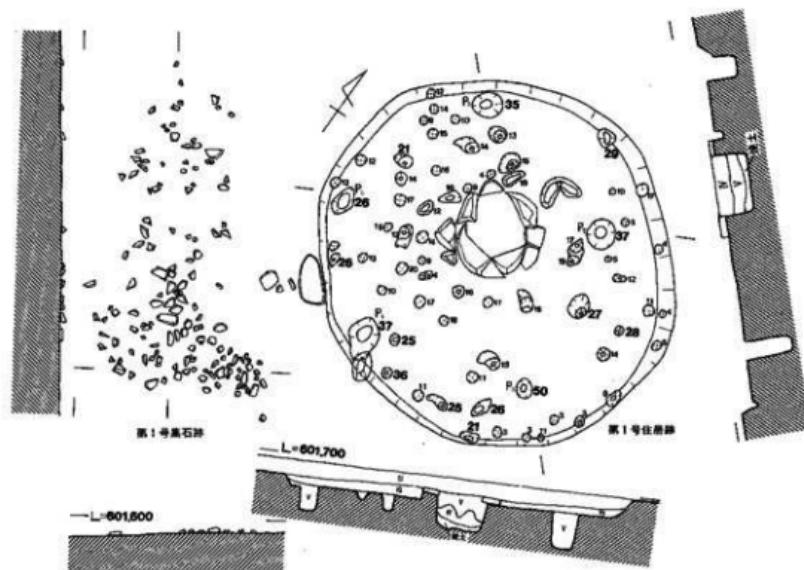
遺物（第16・19・20図、図版3）

出土している遺物は52点で、縄文中期土器片2点、打製石斧4点、敲打器5点、磨り石6点、剥片石器2点、石錐1点、剥片23点、磨製石斧1点、横刃型石器1点、丸石2点、小石4点、古銭（寛永通寶）1点である。

遺物は石器が多く、多種にわたっておりまた剥片（硬砂岩）が多いことから、石器の「製作跡」としての性格をもつと考えられる。

※ ●—土器 □—打製石斧 ■—磨り石 □—敲打器 □—剥片石器 *—剥片
☆—磨製石斧 ○—丸石

第16図 B地区第1号住居跡及び第1号集石跡出土遺物分布図 ($S = \frac{1}{10}$)



第17図 B地区第1号住居跡及び第1号集石跡実測図 ($S = \frac{1}{100}$)

第1号集石跡（第6・16・17・19・20図、図版3）

遺構（第6・17図、図版3）

第1号住居跡の南西方向1.5mの所にあり、集石の広がりは、南北3m60cm、東西2mの範囲である。集石となっている石の質は、硬砂岩が多く砂岩、花崗岩も含まれている。

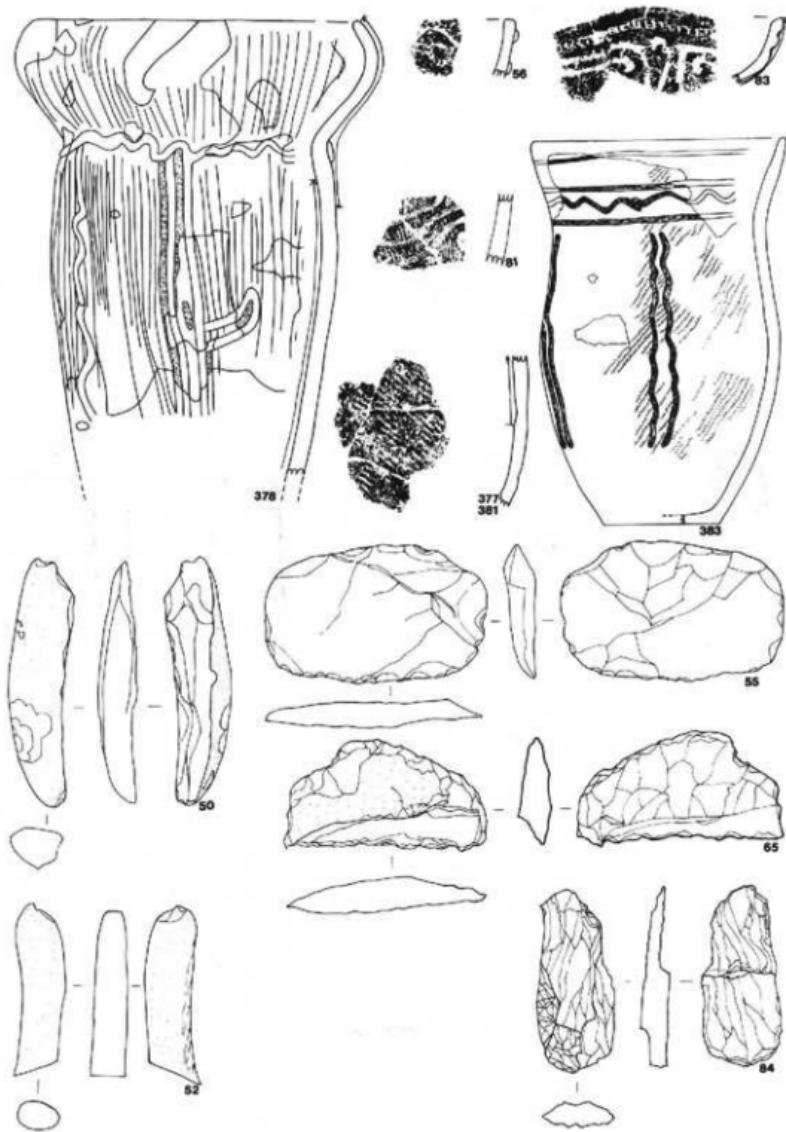
集石跡と1号住の間に、盤状の石（50cm×25cm）が置かれており、集石跡と1号住との有機的関係を示唆するものとも考えられる。

遺物（第16・19・20図、図版3）

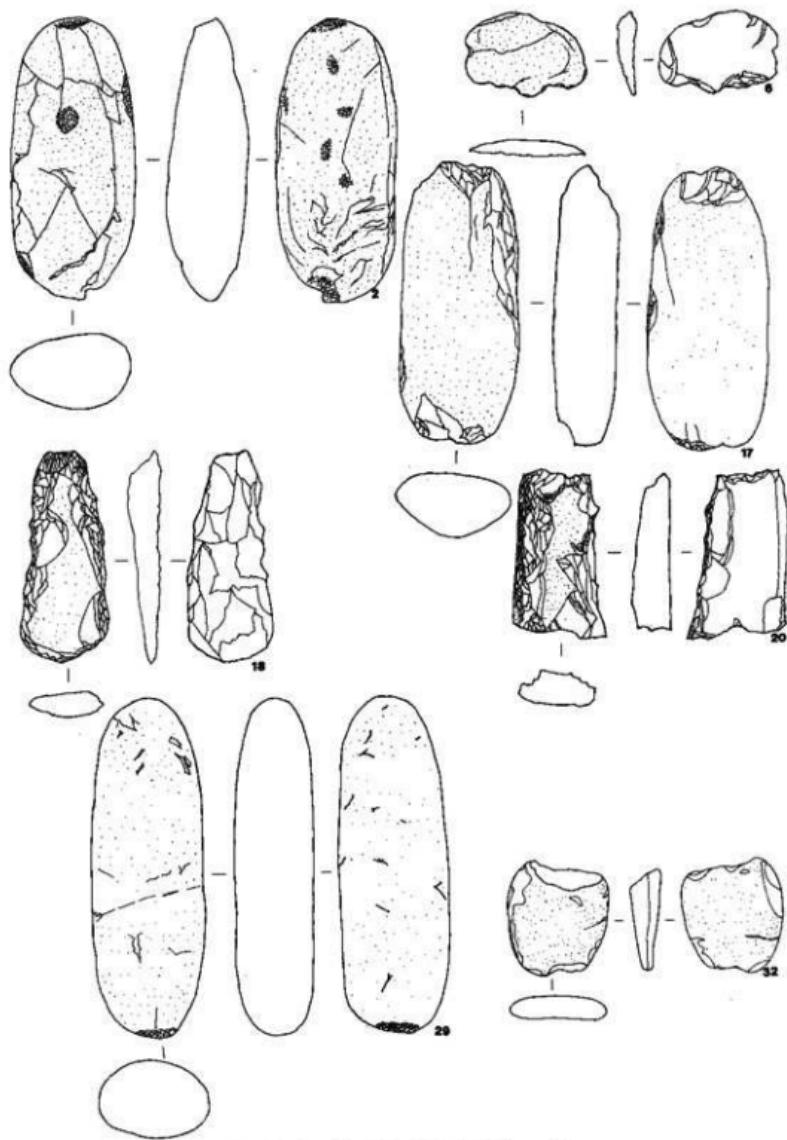
出土している遺物は52点で、繩文中期土器片2点、打製石斧4点、敲打器5点、磨り石6点、剥片石器2点、石錐1点、剥片23点、磨製石斧1点、横刃型石器1点、丸石2点、小石4点、古銭（寛永通寶）1点である。

遺物は石器が多く、多種にわたっておりまた剥片（硬砂岩）が多いことから、石器の「製作跡」としての性格をもつと考えられる。

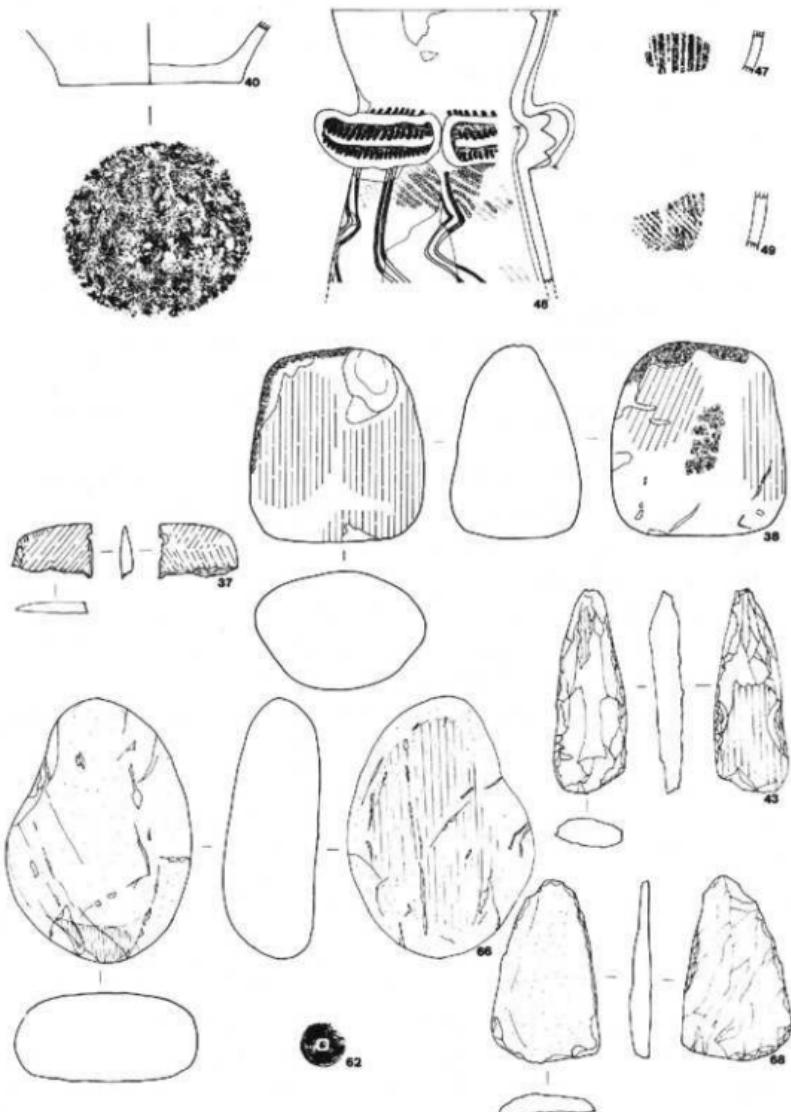
第20図中40・48はヘ-42G表土下より出土し、47・49は第1号住表土下より出土しているが、1号住へは載せなかった。40は底部片で無文。48は深鉢形土器の胴上半部で、口径11.6cm、現高14.5cm、胴径12cm、器壁厚5~8mmを測る。口縁部は開口し無文で、頸部に4単位の間に隆帯を



第18図 B地区第1号住居跡床面及び1号窓石跡出土土器・石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



第19図 第1号集石跡出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



第20図 B地区第1号集石跡及びヘー42G出土土器・石器実測図 ($S = \frac{1}{3}$)
(62・66・68は1号集石、外はヘー42G出土)

もつ楕円形の貼り付けをしヘラ先で刺突文を施す。胴下半は單節斜縞文を地文とし半截竹管で平行沈線を蛇行させている。茶褐色を呈し、細かい長石・石英を含む。47・49は共に胴部片で、前者は平行沈線文を、後者は单節斜縞文を施す。

總じて曾利II式+加曾利II式系に比定できうる。

石器については第19・20図を参照されたい。

第2号住居跡（第21～27図、図版3）

造構（第22図、図版3）

第1号居跡の東方2m50cmの所にある。覆土はIII-IV-IV'-V層と堆積しており、掘り込みは粘性砂質ローム面になされている。

プランは長軸（南西→北東）4m30cm、短軸（南東→北西）3m75cmを測り、ほぼ楕円形を呈する。

柱穴はP₁～P₆の5本が確認され、深さは22～36cmを測る。南西壁寄りに小穴（10cm前後）が集中している点が注目される。

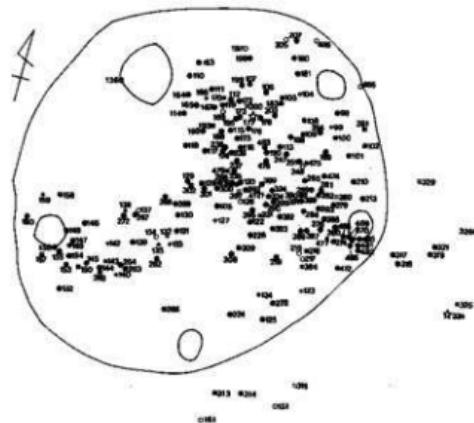
炉跡は不明確な状態で遺存し、床面に残っている5個の盤状の石が炉石に当り、抜き取られた状態を示している。P₂西側の掘り込み下に少量の焼土が検出された。

床面はやや堅致で平坦である。壁は20cm前後の高さを測る。

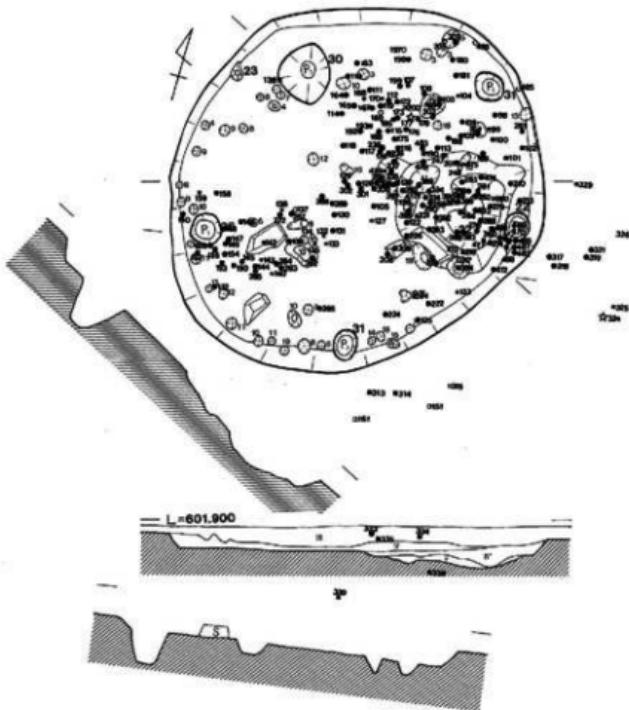
遺物（第21・23～27図、図版3）

出土した遺物は255点であり、縄文中期土器片150点（同一個体含む）、打製石斧5点、磨製石器1点、磨り石8点、石錐2点、石皿2点、凹石1点、敲打器2点、石核1点、黒曜石剝片1点、剥片（硬砂岩）25点、丸石9点、小石27、遺物でなかたもの21点である。

第23図中90・98・100・188・190の同一個体の把手付深鉢形土器は現高14cm、口径15.8cm、最大胴径17.4cm、器壁厚8～12mmを測る。口縁部に2対の突起と把手を粘土ひもで貼り付け、胴部には4単位の縦状の隆帯貼り付けを行い、その間に沈線の蛇行文を垂下させている。頭部にはヘラ先で横走する刺突文をつけ、地文は縦位の条線を施している。把手部は口縁部に孔をうがつしている。淡褐色を呈し細かい長石・石英を多く含む。48・139は内傾する口縁をもつ深鉢形土器の胴上半部で口縁にはヘラ状用具で連続押し引きを行い、入組文や楕円文を施す。胴部下半は半截竹管文を縦位に粗雑に施し、横走する2条の蛇行沈線文をつけている。口径15.2cm、現高15.5cm、胴径12cm、器壁厚は4～7mmを測り薄い。淡褐色を呈し、長石・石英を含む。240・482は、共に半截竹管で縦位の条線を地文とし、蛇行沈線文や渦巻文をつけている。117～476の同一個体の大型深鉢形土器は高さ56cm、胴径39.2cm、口径30.8cm、底径8.8cm、器壁厚8～15mmを測る。口縁に沿って、1条の横走隆帯を貼り付け、頭部にはヘラ先で刻み目をつけている。頭部より底部にかけて隆帯による入組文を貼り付け横走隆帯や蛇行隆帯をつけており4単位で構成する。地文は綾形状文で垂下する蛇行隆帯が間を埋める。淡茶褐色を呈し細かい長石・石英を多く含む。167・212は前者の土器と同様の文様をもつ胴部片である。242は口縁部片で隆帯による蛇行文と刻み目、



●—上器 □—打製石斧 ■—磨り石 □—敲打器 □—剥片石器 *—剥片
 ☆—磨製石斧 ▲—黑曜石剥片 ■—凹石 圖—石核 ○—丸石
 第21圖 B地区第2号住居跡出土遺物分布図 ($S = \frac{1}{50}$)



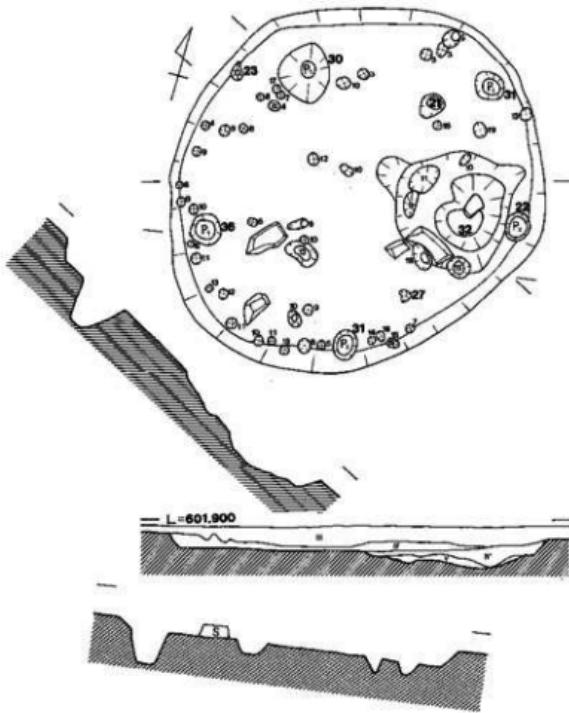
第22図 B地区第2号住居跡実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

縦の条線文を施している。116・192・130は隆帯による貼り付けとヘラ先で粗雑な綾杉状文を施すものである。第24図中113～128の同一個体は口縁部で、内傾した口縁をもち隆帯による波状の入組文を貼りつけ4単位で構成する。波状隆帯の間をヘラ先で連続押し引きをして条線を重複文状につけている。口径28.4cm、現高17cm、胴径22.6cm、器壁厚7～10mmを測る。226・229も前者に似たタイプであるが、口縁部下に無文帶はない。口径16.2cm、頸部径14.4cm、現高9.2cm、器壁厚9～15mmを測る。明灰褐色を呈し、長石・石英を含む。202・180は同一個体であり、口縁部を肥

* ●—土器 □—打製石斧 ■—磨り石 □—敲打器 □—剥片石器 *—剥片

☆—磨製石斧 ▲—黒曜石剝片 □—凹石 ■—石核 ○—丸石

第21図 B地区第2号住居跡出土遺物分布図 ($S = \frac{1}{50}$)

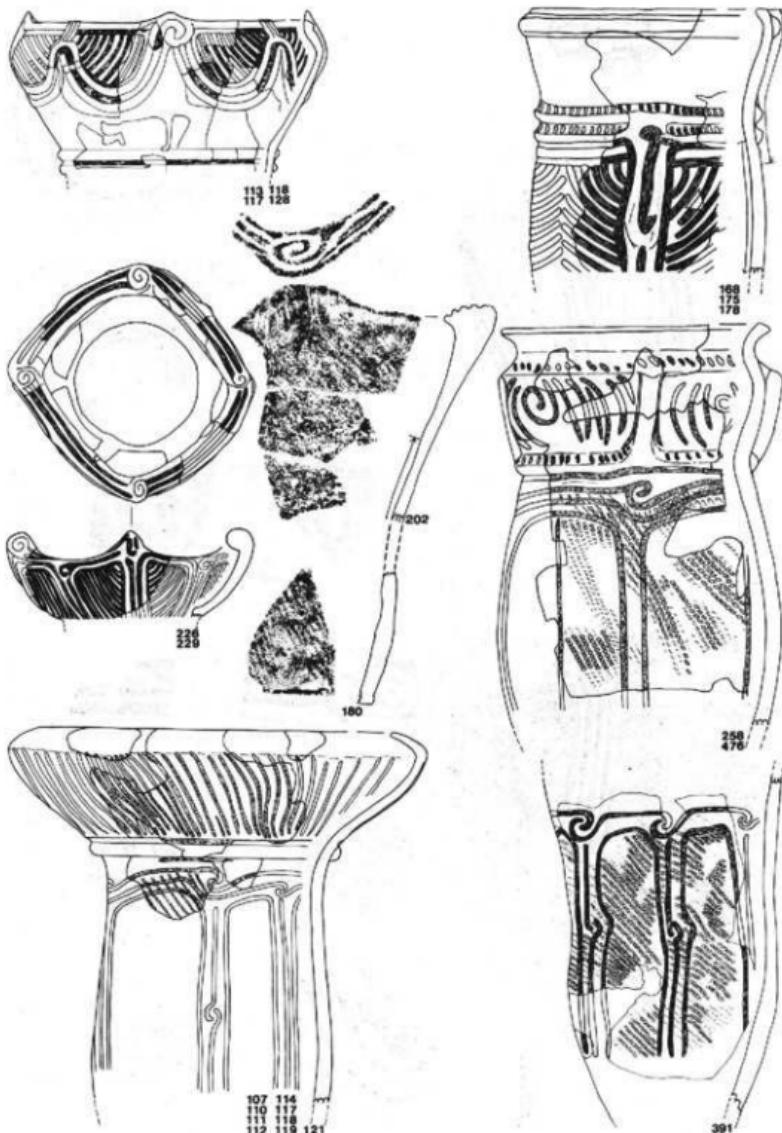


第22図 B地区第2号住居跡実測図 (S = ab)

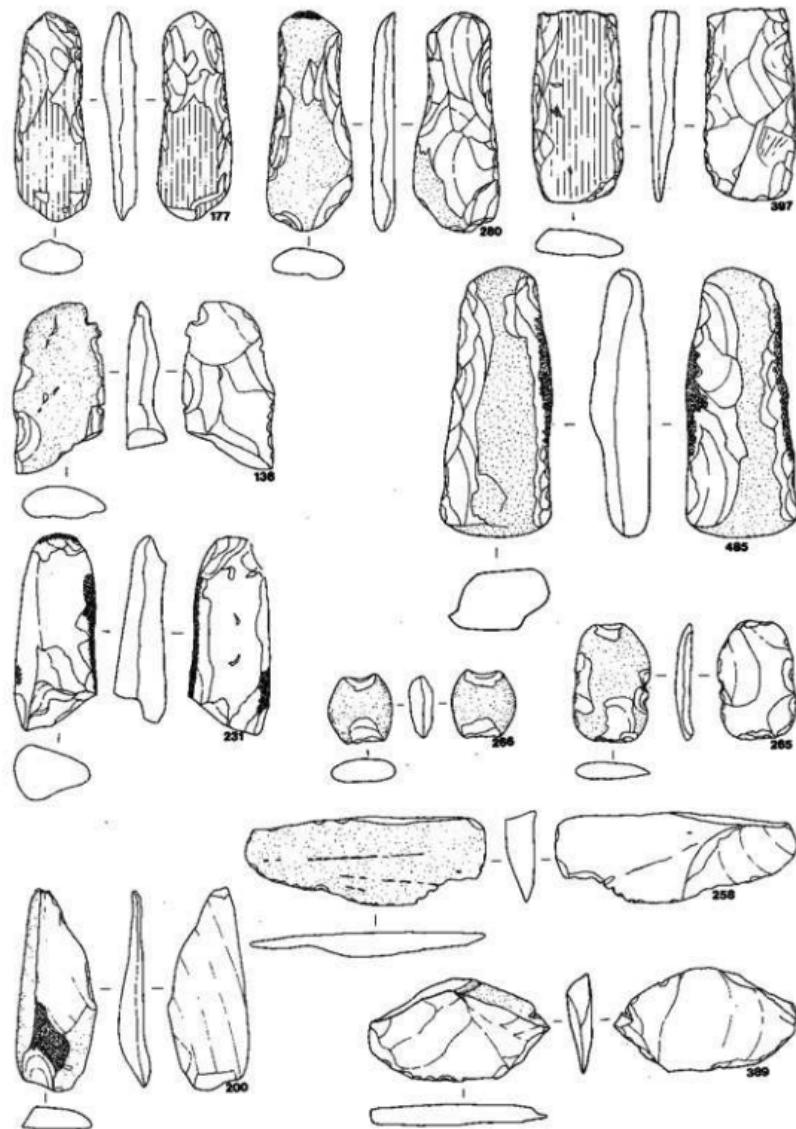
縁の条線文を施している。116・192・130は隆帯による貼り付けとヘラ先で粗雑な綾杉状文を施すものである。第24図中113～128の同一個体は口縁部で、内傾した口縁をもち隆帯による波状の入組文を貼りつけ4単位で構成する。波状隆帯の間をヘラ先で連続押し引きをして条線を重孤文状につけている。口径28.4cm、現高17cm、胴径22.6cm、器壁厚7～10mmを測る。226・229も前者に似たタイプであるが、口縁部下に無文帶はない。口径16.2cm、頸部径14.4cm、現高9.2cm、器壁厚9～15mmを測る。明灰褐色を呈し、長石・石英を含む。202・180は同一個体であり、口縁部を肥厚させ入組文を施し肥厚部表面にヘラ先で粗雑な沈線をつけている。胴下半部は無筋の斜繩文を施している。長石・石英・銀芸母を含む。淡褐色を呈す。168～178の同一個体は無文口縁をもち横走隆帯文が貼りつけられている。頸部には横走隆帯と刺突文が施され、胴部には4単位の入組文をもつ隆帯懸垂文が貼り付けられ、その間には同心円状の沈線文が付けられている。



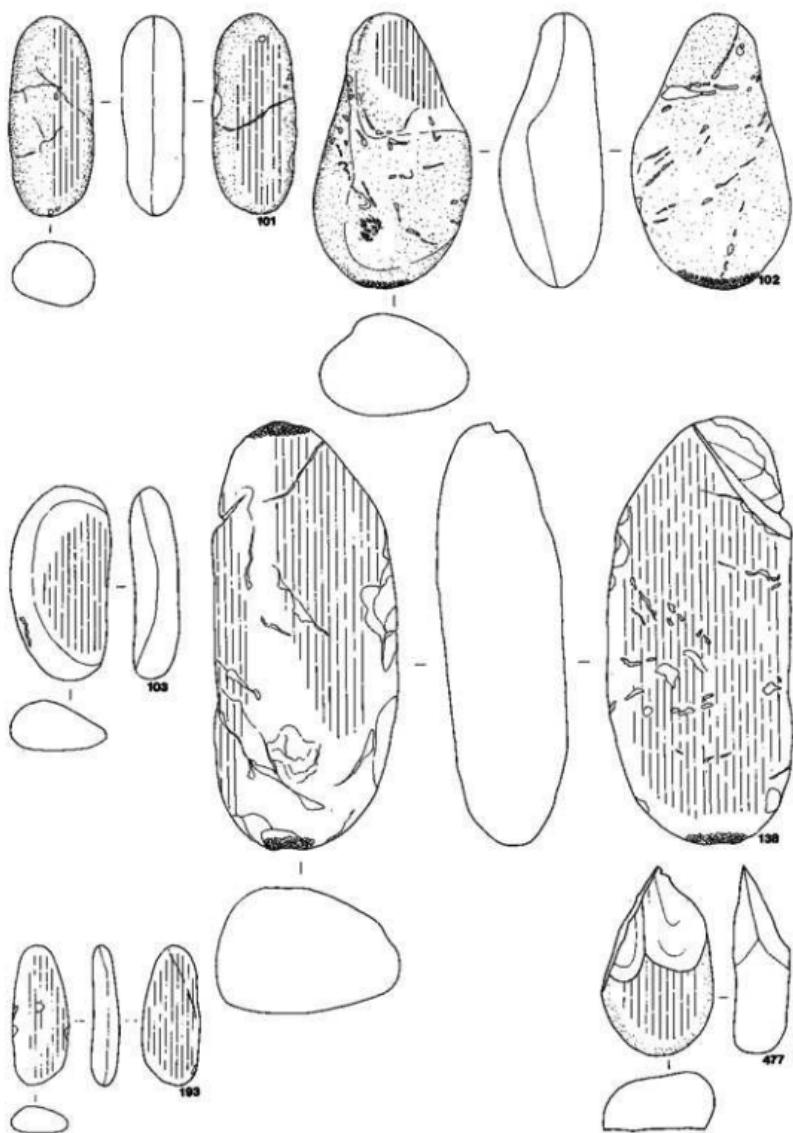
第23図 B地区第2号住居跡床上出土土器実測図 (139、117-476は $\frac{1}{2}$ 、外は $\frac{1}{4}$)



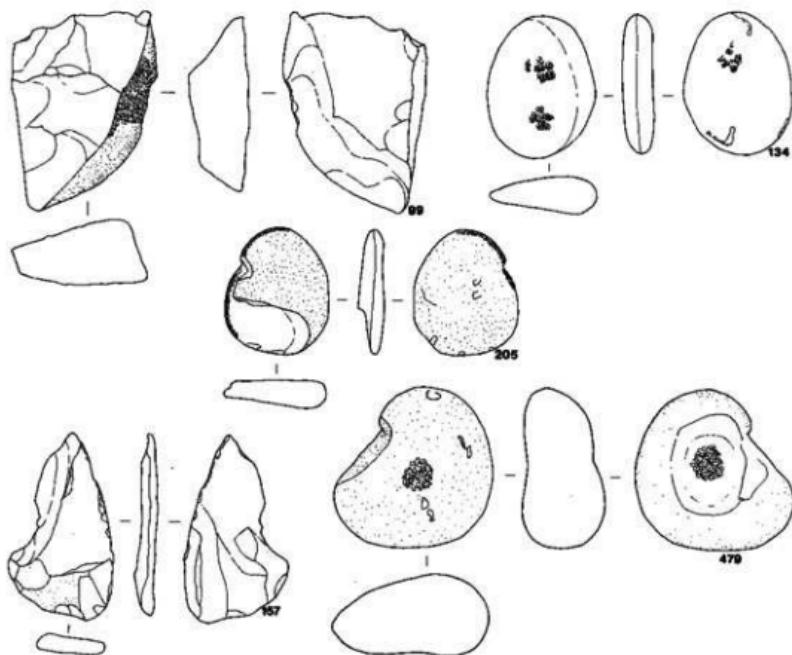
第24図 B地区第2号住居跡床上出土土器実測図 (113-128, 226・229は $\frac{1}{2}$ 、外は $\frac{1}{3}$)



第25圖 B 地區第2號住居跡床上出土石器實測圖 ($S = \frac{1}{2}$)



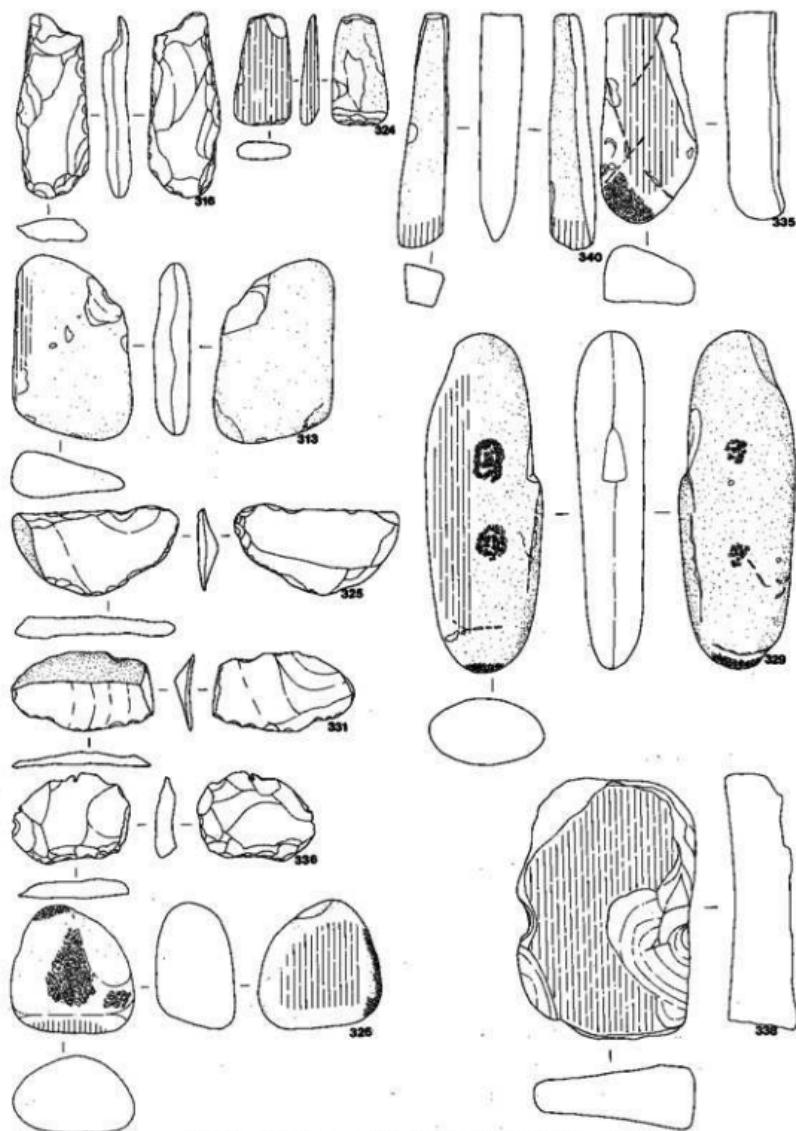
第26图 B地区第2号住居跡床上出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



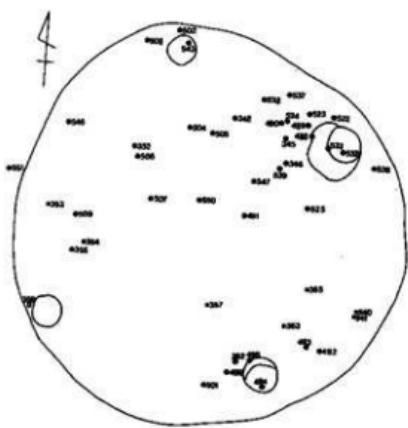
第27図 B地区第2号住居跡床上出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

口径12.6cm、胴径12.6cm、現高14cm、器壁厚5~11mmを測る。灰褐色を呈し、長石・石英を含む。258・476は深鉢形土器の底部を欠く上器で、口唇部を外反させ口縁から胴部にかけて張り出してふくらみをもたせ4単位の隆帯を貼り付けヘラ先による刺突文と重弧文状の沈線文をついている。胴部には単節斜繩文を地文とし沈線による入組文と懸垂文を施す。口径14.4cm、胴径15.2cm、現高15.2cm、器壁厚5~9mmを測る。明褐色を呈し、細かい長石・石英を含む。107~121の同一個体は口唇部を内傾させ、開口した口縁部をもつ深鉢形土器の胴上半部である。口唇部は無文でその下にヘラ先で縱位の条線をつけ、頭部には横走隆帯を貼り付け、胴部には単節斜繩文を地文として沈線で入組文と懸垂文を施している。口径20cm、胴径13cm、現高19.7cm、器壁厚5~8mmを測る。淡灰褐色を呈し長石・石英・雲母を含む。391は前者の土器の胴部と同様の土器であり、現高18cm、胴径11.2cm、器壁厚6~9mmを測る。淡黄褐色を呈し長石・石英を含む。

第23図中の土器群及び第24図113~128、168~178、226・229は唐草文系II~IIIに比定され、180・202、258・476、107~121、391は加曾利E II式系の影響を受けた上伊那型の土器である。石器については25~27図を参照されたい。なお周辺からは第28図の石器類が出土している。

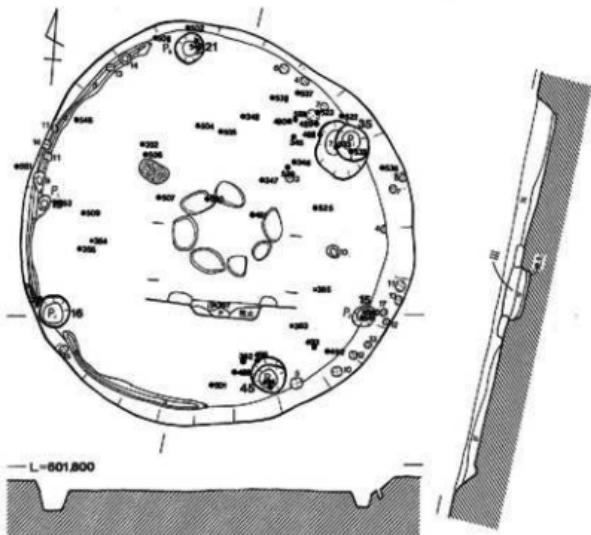


第28図 B地区ヤー41・42Gフク土出土石器実測図 (S=+)
(No313, 316, 324~326は、ヤー41G、外は42G)



※ ●—土器 ■—磨り石 □—敲打器 ○—弥生式土器 ▨—棒状石器

第29図 B地区第3号住居跡出土遺物分布図 ($S = \frac{1}{50}$)



第30図 B地区第3号住居跡実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

第3号住居跡（第7・29～32図、図版4）

遺構（第7・30図、図版4）

第1号住居跡のすぐ南側に位置する。覆土はIII-V層により埋まる。

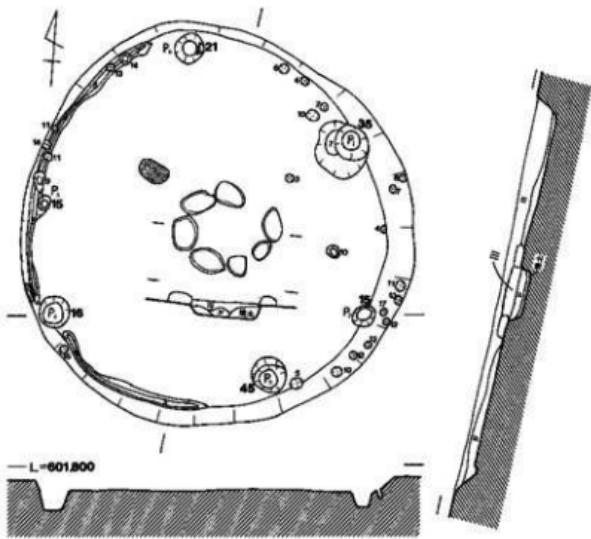
プランは南北4m30cm、東西4m20cmを測りほぼ円形を呈す。

柱穴はP₁～P₆の6本が想定され、深さは15～45cmを測りばらつきがある。

炉跡は花崗岩の玉石を8個組み合せたものであるが1個が欠けている。炉内はIII層-10cm前後、IV層-10cm、焼土-5cm前後堆積している。

※ ●—土器 ■—磨り石 □—敲打器 ○—弥生式土器 ▽—棒状石器

第29図 B地区第3号住居跡出土遺物分布図 ($S = \frac{1}{50}$)



第30図 B地区第3号住居跡実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

第3号住居跡（第7・29~32図、図版4）

遺構（第7・30図、図版4）

第1号住居跡のすぐ南側に位置する。覆土はIII-V層により埋まる。

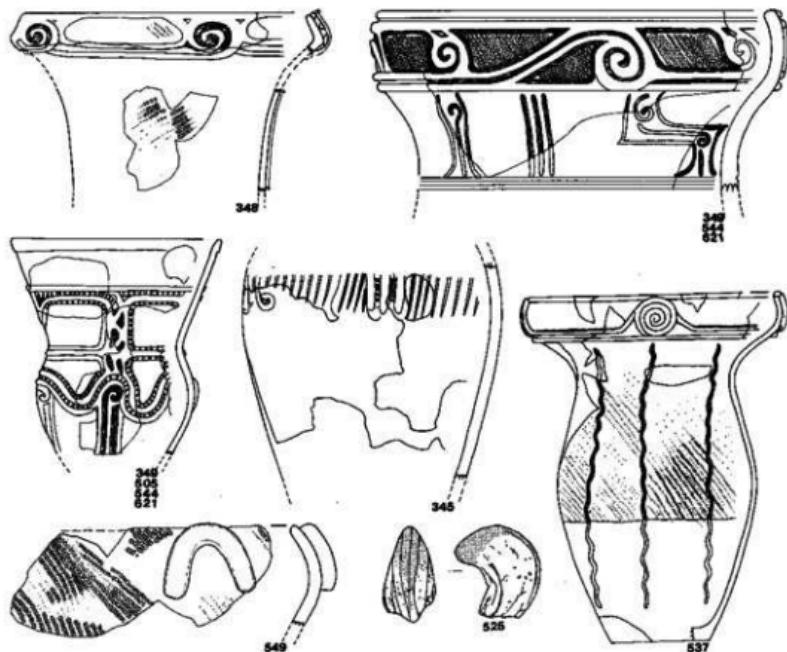
プランは南北4m30cm、東西4m20cmを測りほぼ円形を呈す。

柱穴はP₁~P₆の6本が想定され、深さは15~45cmを測りばらつきがある。

炉跡は花崗岩の玉石を8個組み合せたものであるが1個が欠けている。炉内はIII層-10cm前後、IV層-10cm、焼土-5cm前後堆積している。

床面は堅致で平坦であり、西壁には深さ5cm前後の周溝をもつ。本遺跡で周溝をもつのは当住居跡だけである。

なお床面西壁寄り床面に焼土が3cmほど遺存していた。

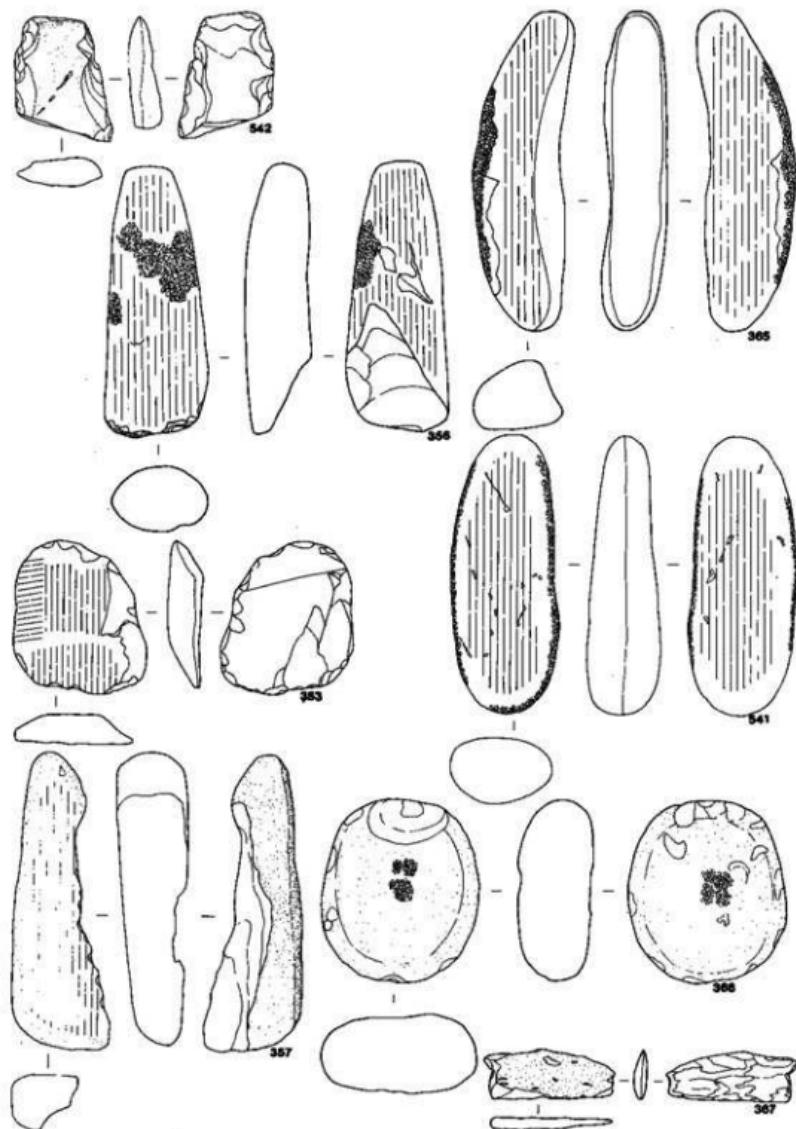


第31図 B地区第3号住居跡床面出土土器実測図（348・349-621・349-621・526・537は口、外は寸）

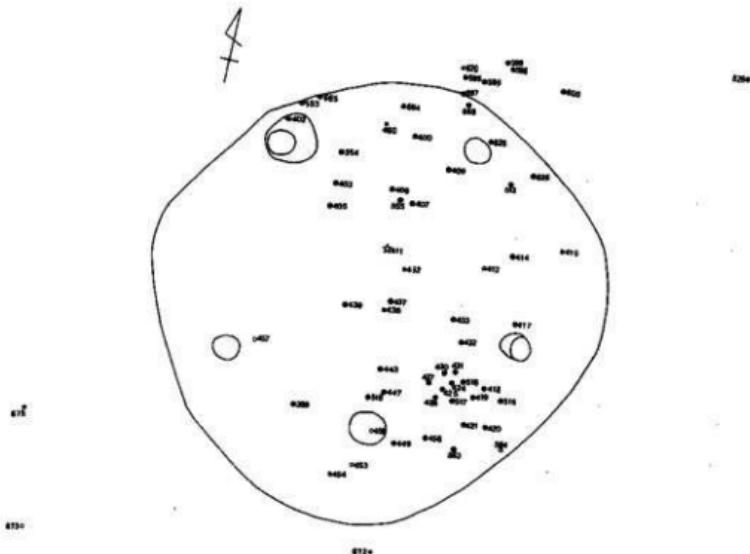
遺物（第29・31・32図、図版4）

出土した遺物は83点で、縄文中期土器片60点（同一個体含む、弥生式土器1個体、打製石斧1点、凹石1点、棒状石器1点、敲打器1点、磨り石5点、剥片4点、小石8点、土師器1点である。

第31図中348は口縁が内傾した深鉢形土器で口径29.2cm、現推定高20cm、胴径21cm、器壁厚5mm前後を測る。口縁部は隆帯で渦巻文を貼り付け、その間に楕円状の区画の中に単節斜縄文を施し、胴部下も同様に斜縄文を施す。暗褐色を呈し長石・石英・黒雲母を含む349・544・621の個体は大型深鉢形土器の口縁部片である。口径42.2cm、胴径34cm、現高19.3cm、器壁厚12~18mmを測る。口縁部は隆帯により渦巻文を連続して貼り付けその間に単節斜縄文でうめる。頭部は沈線により劍先文や懸垂文をつけていて、その下に2条の横走沈線をついている。赤褐色を呈し長石・石英を多く含む。349~621は深鉢形土器で、底部を欠く。口唇部は肥厚させてあり無文帶をもつ。頭部上端から胴下部にかけて隙帯によるわらび手文の連続した貼り付けを行っている。さらに、

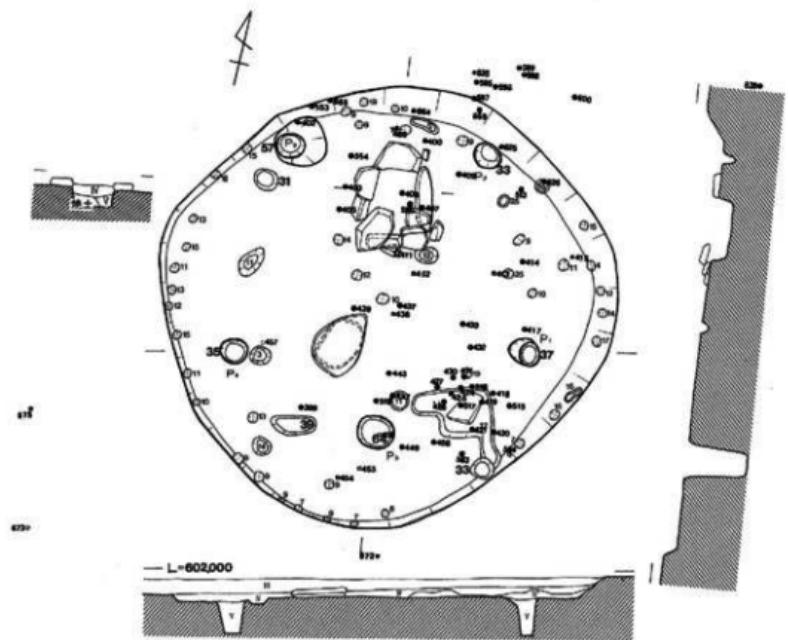


第32图 B地区第3号住居跡床上出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



●—土器 □—打製石斧 □—敲打器 △—剥片石器 ☆—磨製石斧 ◆—石匙
 ■—磨り石

第33図 B地区第4号住居跡出土遺物分布図 (S = 1m)

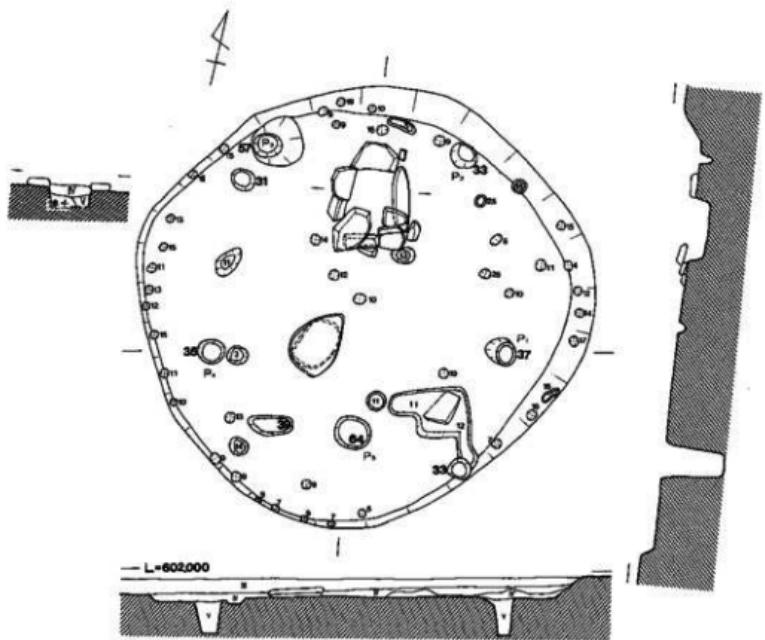


第34図 B地区第4号住居跡実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

貼り付け部に沿ってヘラ先で刺突文をつけている。その外は無文である。口径21.6cm、胴径16.8cm、現高23cm、器壁厚6~8mmを測る。淡赤褐色を呈し長石・石英を多く含む345は深鉢形土器胴部片で、隆帯による懸垂文の末端が残り地文はヘラ先で条線がつけられている。なお隆帯に沿って半截竹管文で押し引きをしている。胴径13.8cm、現高11.4cm、器壁厚5~7mmを測る。茶褐色を呈し長石・石英を多く含む。537は典型的なキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部はやや内湾し粘土ひもにより4単位の渦巻文が連結して貼り付けてある。胴部は単節斜繩文を地文として沈線で蛇行懸垂文がつけられている。口径19.2cm、胴径21.2cm、現高37cm、器壁厚6~8mmを測る。明褐色を呈し細かい長石・石英を多く含む。549は口縁部片で、推定口径32cmであり口縁に馬蹄状の貼り付けをし斜繩文を施している。525は鶴頭状の突起部である。

※ ●—土器 □—打製石斧 □—敲打器 □—剝片石器 ☆—磨製石斧 ◆—石匙
■—磨り石

第35図 B地区第4号住居跡出土遺物分布図 ($S = \frac{1}{50}$)



第34図 B地区第4号住居跡実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

貼り付け部に沿ってヘラ先で刺突文をつけている。その外は無文である。口径21.6cm、胴径16.8cm、現高23cm、器壁厚6~8mmを測る。淡赤褐色を呈し長石・石英を多く含む345は深鉢形土器胴部片で、縁部による懸垂文の末端が残り地文はヘラ先で条線がつけられている。なお縁部に沿って半截竹管文で押し引きをしている。胴径13.8cm、現高11.4cm、器壁厚5~7mmを測る。茶褐色を呈し長石・石英を多く含む。537は典型的なキャリバー形の深鉢形土器で、口縁部はやや内湾し粘土ひもにより4単位の渦巻文が連結して貼り付けてある。胴部は単筋斜繩文を地文として沈線で蛇行懸垂文がつけられている。口径19.2cm、胴径21.2cm、現高37cm、器壁厚6~8mmを測る。明褐色を呈し細かい長石・石英を多く含む。549は口縁部片で、推定口径32cmであり口縁に馬蹄状の貼り付けをし斜繩文を施している。525は鶴頭状の突起部である。

349~621・525は唐草文系I~IIに、345は曾利I~IIに、348・349・549・537は加曾利E II式系に比定できる。

石器については第32図を参照されたい。

なお、覆土中より図版4中363の弥生式土器と思われるものが出土しているが判別は不明確。

第4号住居跡（第6・33～39図、図版4）

造構（第6・34図、図版4）

第2号住居跡の南方6mの地点に位置する。覆土はIII～IV～IV'～V層が堆積し、掘り込みは粘性砂質ローム面になされている。

プランは南北4m45cm、東西4m65cmで隅丸の方形を呈する。

柱穴はP₁～P₆の5本が想定され、深さ33～64cmを測る。P₂・P₃の南側に深さ25cm、31cmの小穴とP₆をはさんで深さ39cm、33cmの小穴があり補助柱穴とも考えられる。壁に沿って深さ15cm前後の小穴があり支柱穴と考えられる。

炉跡は北壁に寄つて遺存し第1・2号住居跡同様粘板岩の盤状の石を用いており長軸1m30cm、短軸80cmを測る。炉内には焼土-10cm前後、V層-10cm前後、IV層-15cm前後が堆積していた。

床面は堅敷で平坦であり、床面中央やや西壁寄りに70cm×50cmと55cm×40cmの粘板岩製の盤状石2枚が重ねて置かれてあった。さらに東壁寄りのピット内にも35cm×25cmの粘板岩が遺存していた。

遺物（第33・35～39図、図版4）

本住居跡より出土した遺物は175点を数える。繩文中期土器片63点（同一個体含む）、打製石斧11点、磨製石斧1点、磨り石6点、敲打器3点、石皿1点、石匙1点、石核13点、剥片石器8点、剥片19点、石英片1点、小石43点、遺物でなかったもの5点である。

第35図中439は耳状の把手部であり、同様のものが右側にもあったと考えられ双頭状を呈していたのかもしれない。耳状の部分には深い沈線で「わらび手」状文が施され、器表面にはヘラ先で沈線が斜めにつけられている。淡黄褐色を呈し長石・石英を多く含む。411は口縁が内傾した浅鉢形土器の一部と考えられる。隆帯による蛇行文が施されている。黒褐色を呈し表面には「すす」が裏面には「おこげ」が付着しており長石・石英を含む。400は口縁部で口唇部を肥厚させていて口縁に沿つて沈線をひき下方には、ヘラ先で縱位・横位の条線を施す。暗褐色を呈し長石を多く含む。462は深鉢形土器の胴部で胴径14.2cm、現高10.8cm、器壁厚8mm前後を測る。

「人体文」の退化した隆帯を貼り付けヘラ先で刻み目をつけ地文にはヘラ先で縱の条線を施している。茶褐色を呈し長石を多く含む。513は口縁部を欠く深鉢形土器で、胴径19.2cm、底径9.2cm、現高28cm、器壁厚8～10mmを測る。粘土ひもによる隆帯懸垂文を貼り付け「わらび手」状文をなす。中間には同じく隆帯懸垂文と沈線による蛇行懸垂文を施す。地文はヘラ先による綾杉文と斜条線がつけられている。499は深鉢形土器で高さ21.3cm、口径15cm、胴径16.6cm、底径8.7cm、器壁厚8mm前後を測る。内傾した口縁をもち粘土ひもを横走させ指圧して貼り付け単節斜縫文をつけその上に隆帯による蛇行文を貼り付けている。頸部は無文で胴部には単節斜縫文を施す。茶褐色を呈し長石・石英を含む。515は口縁部で渦巻状の隆帯を貼り付け単節斜縫文を施す。439は頸部に横走する隆帯と蛇行隆帯を貼り付け斜縫文を施す。517は胴径26.2cm、現高19cm、器壁厚4～6mmであり斜縫文を施す。553は底部片で底径9cmで沈線文と斜縫文がつけられている。

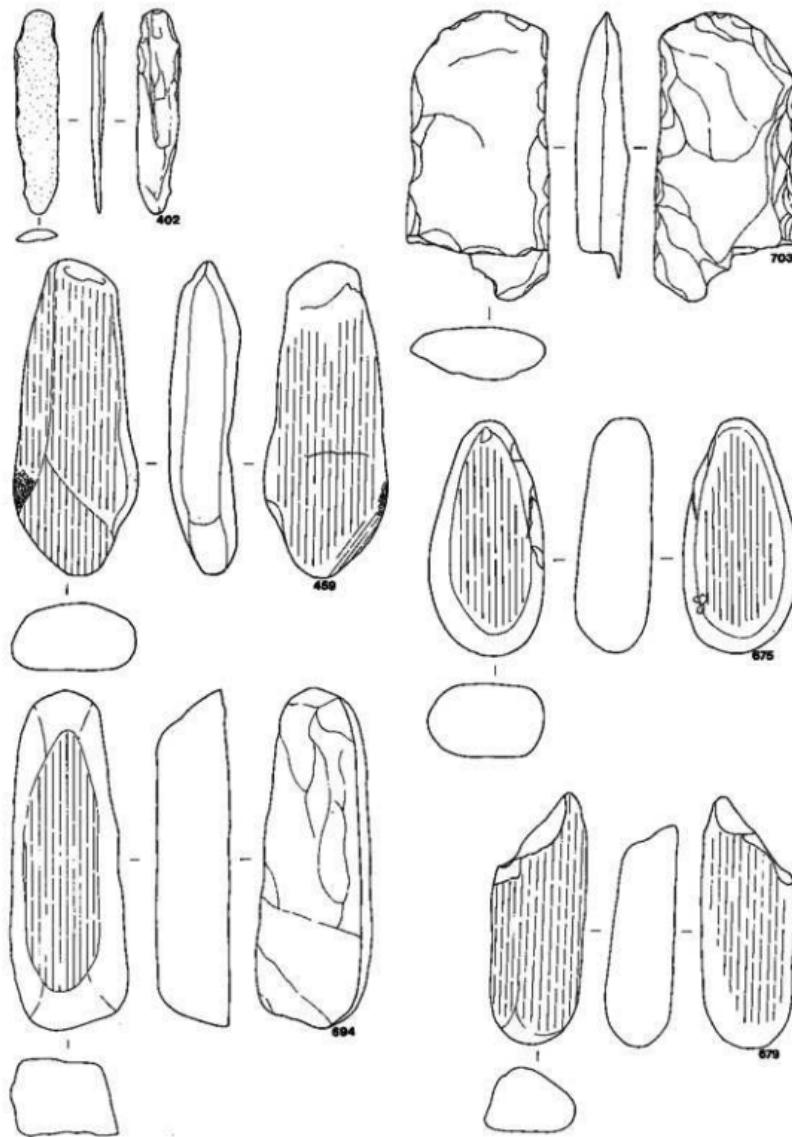
439・411はやや古く400・462は曾利I～II式に比定でき513は唐草文系IIに比定できる。



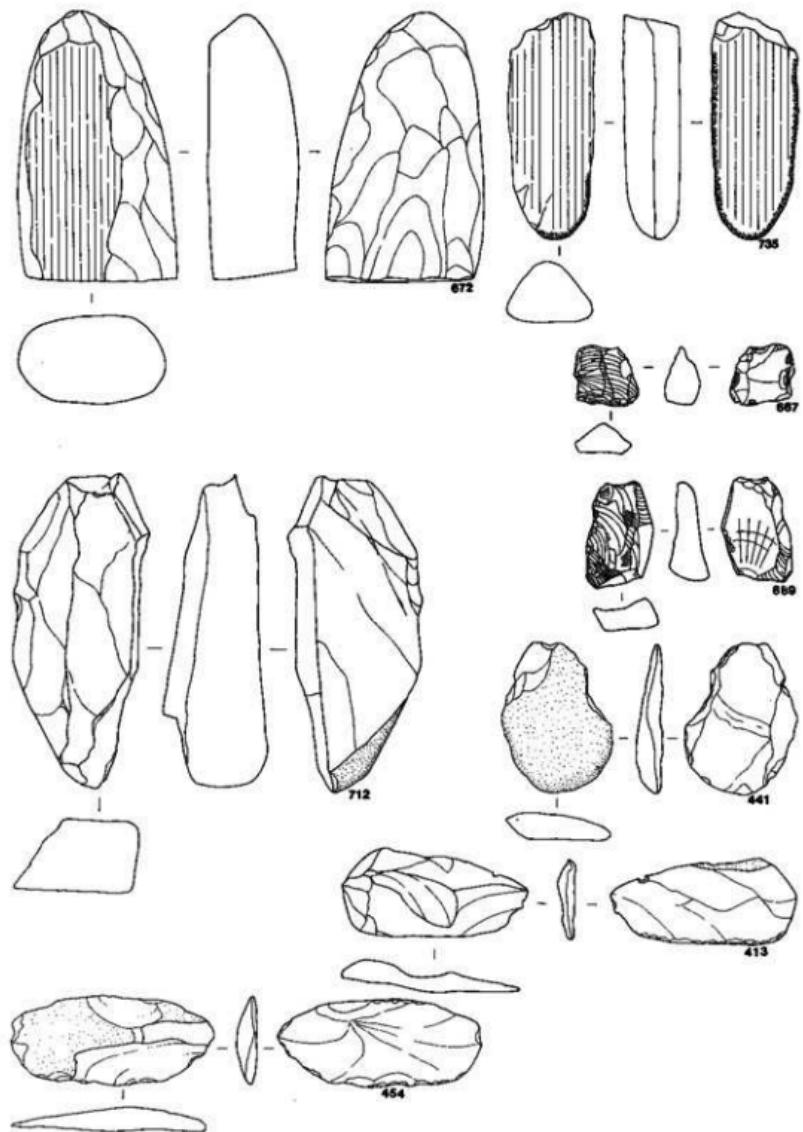
第35図 B地区第4号住居跡床面出土土器実測図 (411・517は $\frac{1}{2}$ 、外は $\frac{1}{4}$)



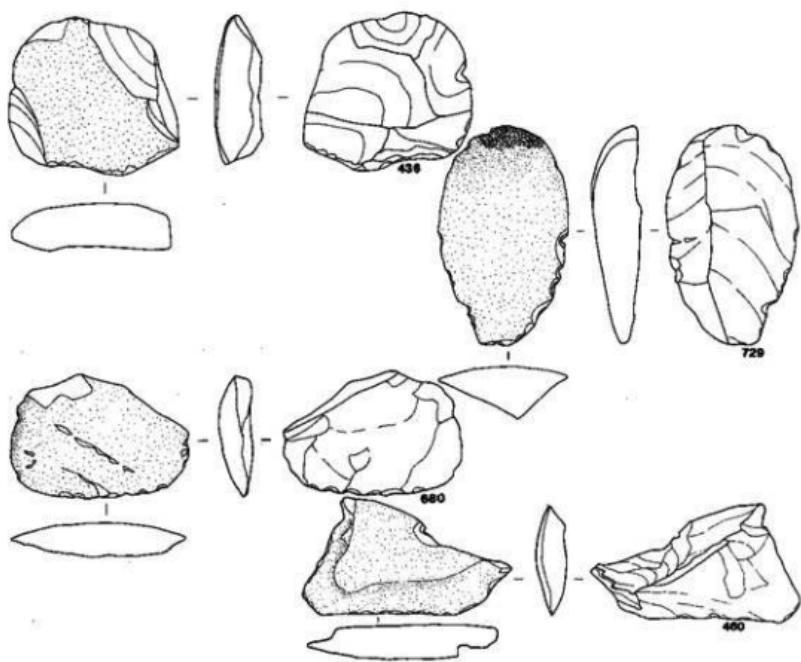
第36图 B地区第4号住居跡床上出土石器实测图 ($S = \frac{1}{2}$)



第37图 B地区第4号住居跡床上出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



第38图 B地区第4号住居跡床上出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



第39図 B地区第4号住居跡床上出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

515は加曾利E II式に比定でき、499・439・517・553は大木式系及び加曾利E式系の影響を受けた上伊那型の土器である。

石器については第36~39図を参照されたい。

第2号集石跡（第6・40・42~45図）

造構（第6・40図）

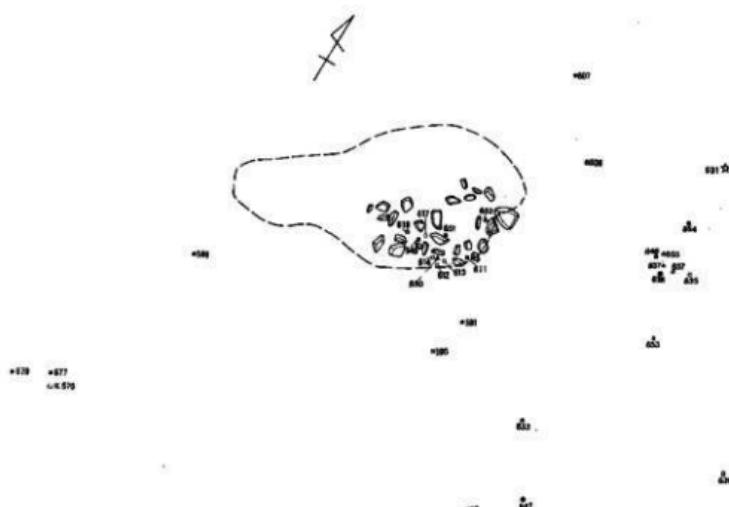
第2号集石跡は第2号土壌の上層に位置し長軸1m60cm、短軸1mの長方形に集石している。集石は平面的になされ、硬砂岩が主で花崗岩も含まれている。

遺物（第40・42~45図）

出土遺物は10点で、打製石斧3点、磨り石2点、剥片石器1点、石核1点、石錐1点、黒曜石剥片1点、丸石1点である。

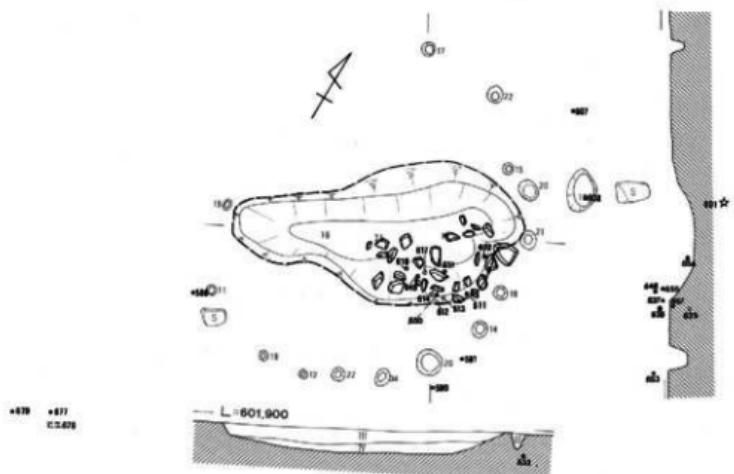
石質は全て硬砂岩である。

2号集石跡周辺から42~45図のような遺物が出土しているのでご参照されたい。

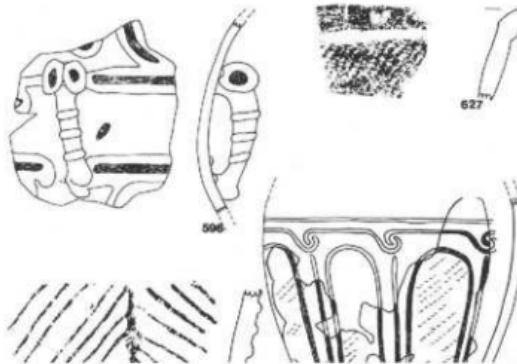


●—土器 □—打製石斧 □—敲打器 ○—丸石 □—剥片石器 ■—石核
 ☆—磨製石斧 ●—石錘

第40図 B地区第2号集石跡実測図及び出土遺物分布図 ($S = \frac{1}{10}$)

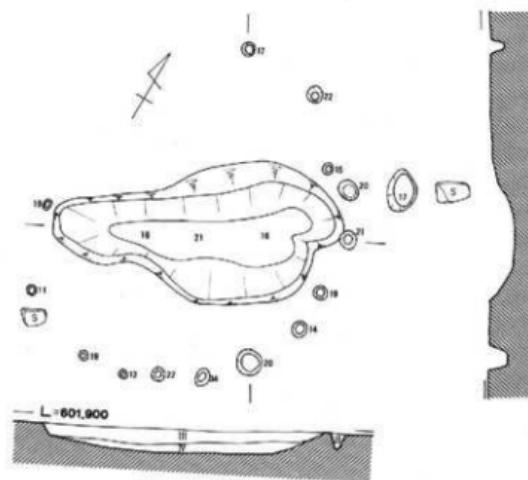


第41図 B地区第2号土坑実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

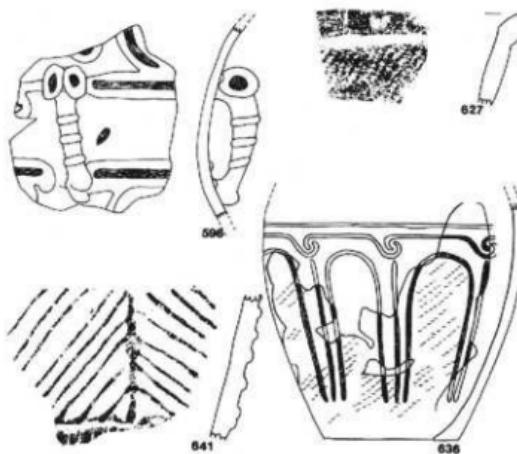


※ ●—土器 □—打製石斧 □—敲打器 ○—九石 □—剥片石器 ■—石核
☆—磨製石斧 ◆—石錐

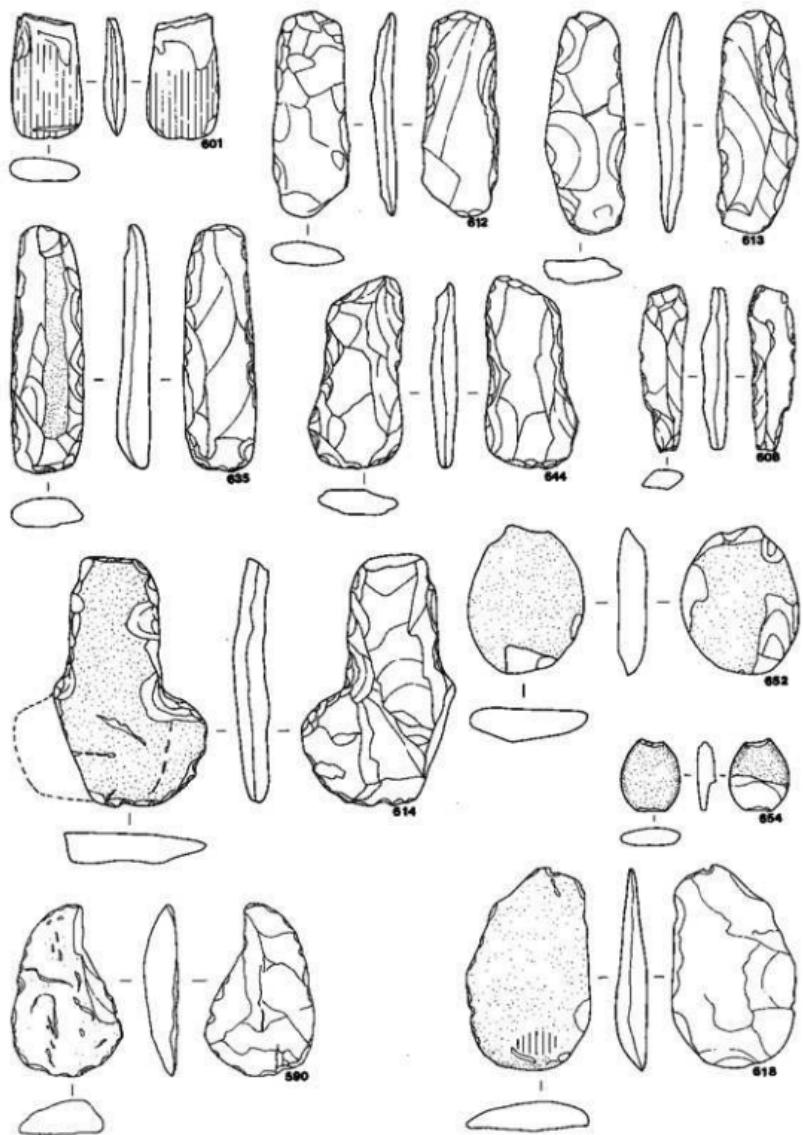
第40図 B地区第2号窯跡実測図及び出土遺物分布図 ($S = \frac{1}{50}$)



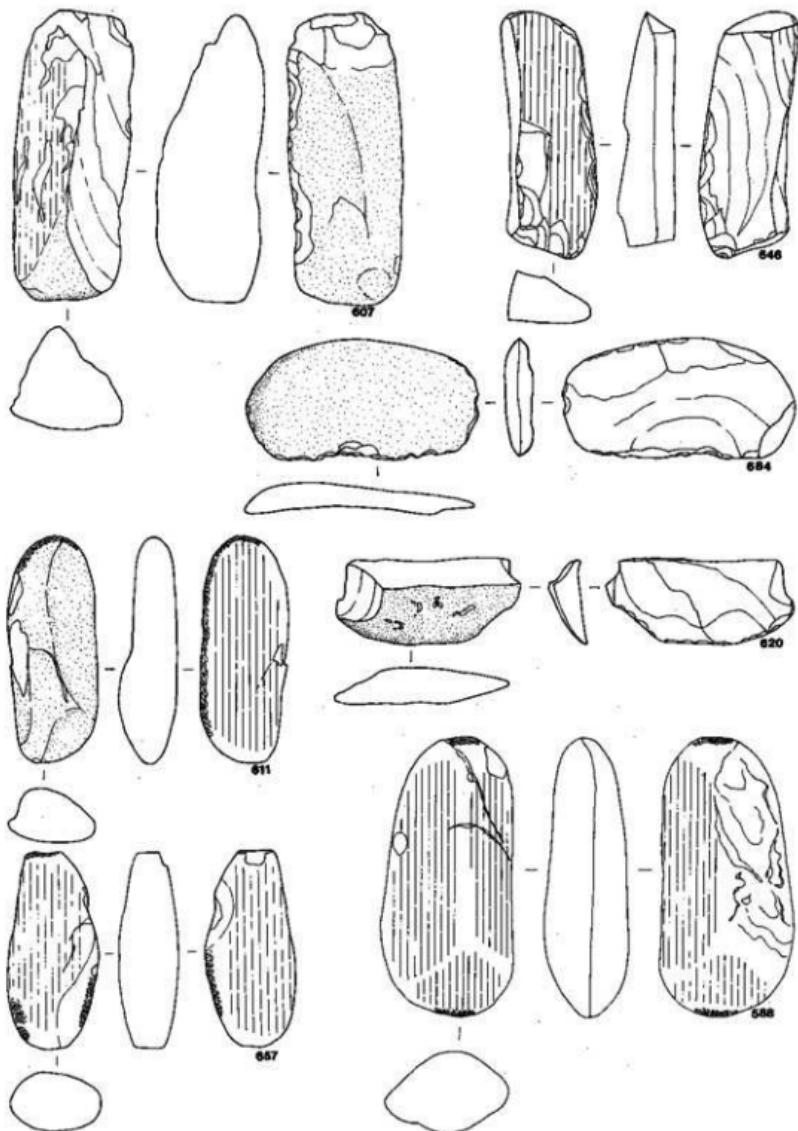
第41図 B地区第2号土灶実測図 ($S = \frac{1}{60}$)



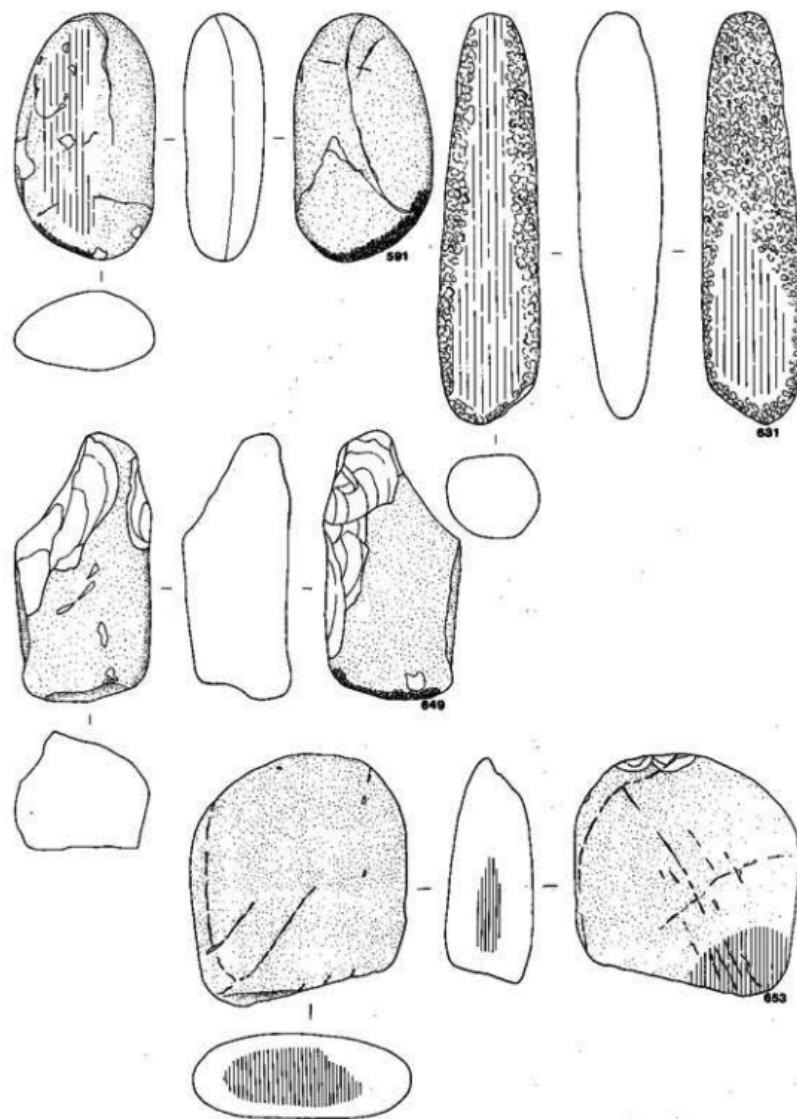
第42図 B地区第2号集石跡周辺出土土器実測図 ($S = \frac{1}{3}$)



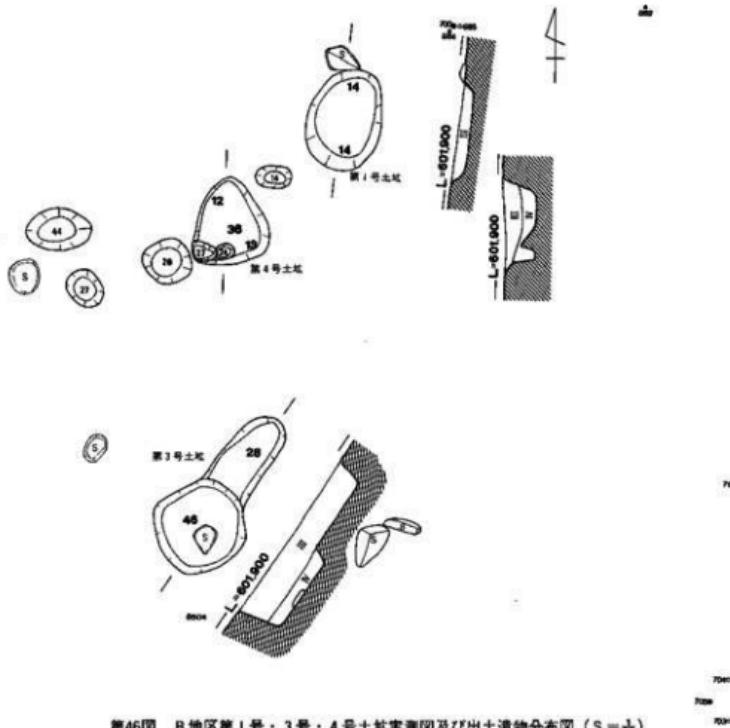
第43図 B地区第2号集石跡及び周辺出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



第44図 B地区第2号墓石跡周辺出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)



第45図 B地区第2号集石跡周辺出土石器実測図 ($S = \frac{1}{2}$)

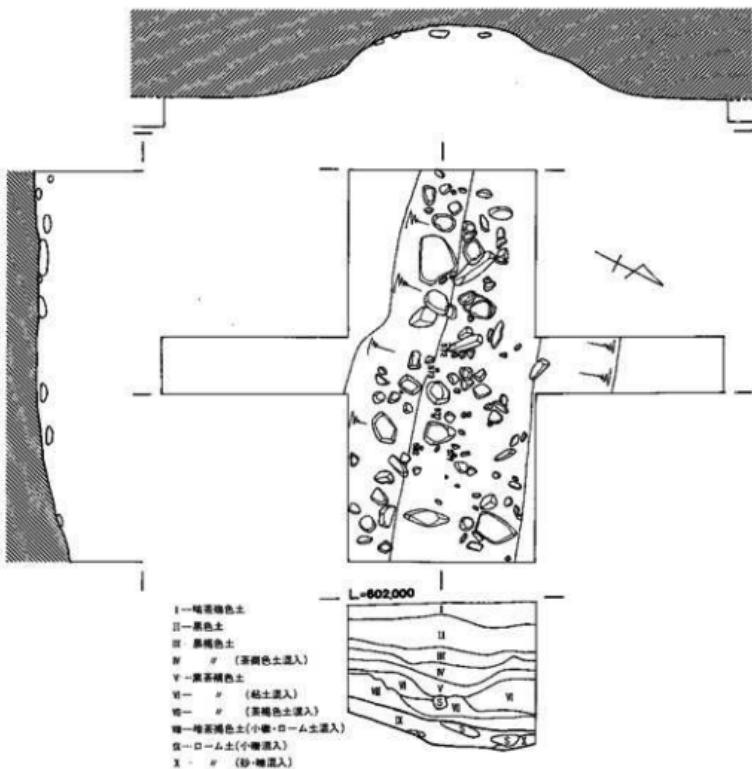


第46図 B地区第1号・3号・4号土竪実測図及び出土遺物分布図 (S = $\frac{1}{2}$)

第1～4号土竪（第6・41・46図、図版5）

遺構・遺物

第1号土竪は1m8cm×80mの楕円形を呈し深さ14cmを測りIII層が堆積する。第2号土竪は3m12cm×1m52cmの不整形を呈し深さ20cm前後を測りIII・IV層が堆積する。土竪を圓む形で深さ20cm前後的小ピットが14個存在する。第3号土竪は1m92cm×1mの錐穴状を呈し中段をもち深さ28cmと46cmを測りIII・IV層が堆積する。第4号土竪は92cm×85cmの三角形を呈し底部はくぼみ深さ36cmを測りIII層が堆積する。各土竪とともに出土遺物はなく周辺に若干遺存していた。



第47図 B地区溝状造構実測図及び出土遺物分布図 (S = 南)

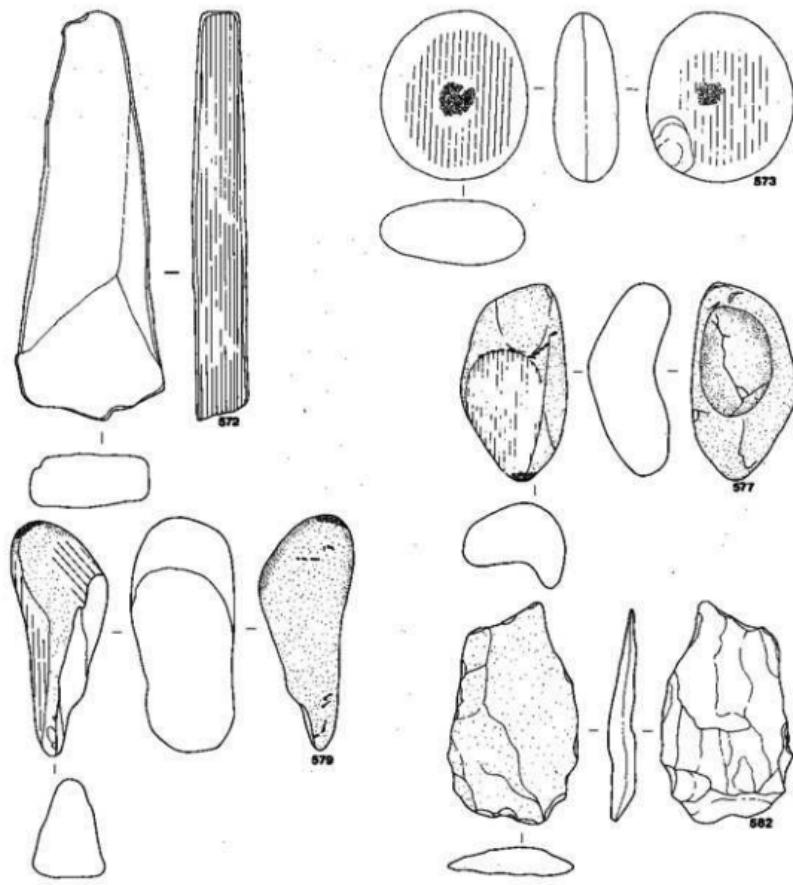
溝状造構（第6・47・48図、図版5）

造構（第6・47・48図、図版5）

当遺構はB地区1～4住の南側8mの所に位置し東から西へ向かって傾斜している。覆土は第47図中の様にI層からX層まで堆積しVII-X層にかけては小砾・礫・砂が混じっている。基盤までの深さは1m55cmを測り南壁の傾斜はゆるく北壁はややきつい。

遺物（第48図）

出土遺物は5点あり、磨り石が2点、剥片石器が1点、凹石が1点、と石が1点である。いずれもVII層中より出土している。



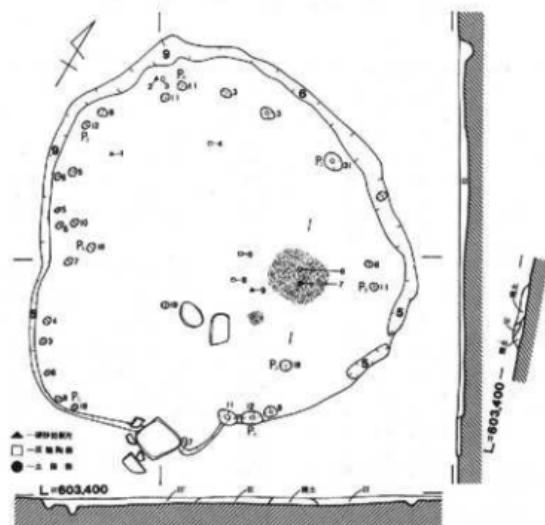
第48図 B地区溝状造構下層出土石器実測図 (572は×、外は×)

第4節 調査C区遺構と遺物（第7・49・50図、図版5）

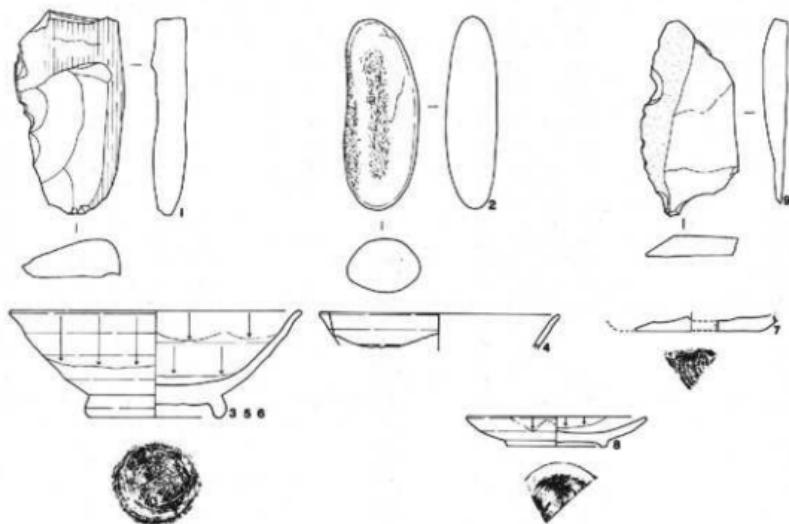
第1号住居跡

遺構・遺物

調査C区の中で唯一の造構で4m50cm×4m10cmの不整円形を呈し覆土はIII層が堆積する。柱穴は8本考えられ11~31cmを測り床面はやや軟弱で東壁寄り床面に7~8cmの焼土が遺っていた。遺物は第50図中のもので石器3点と灰釉3点、土器1点であり11~12Cのものである。



第49図 C地区第I号住居跡実測図 ($S = \frac{1}{50}$)



第50図 C地区第I号住居跡床面出土遺物実測図 ($S = \frac{1}{50}$)

については判明しがたい。後日の機会に土壤分析の結果を報じたい。

しかし覆土及び床面に炉跡があったと考えられる焼土や石組みが全く検出されなかった。それに加えて床面や壁に支柱穴や小穴が認められなかった。これらの点より第1号住居跡が当遺跡及び当集落の中で特別の意味をもっていたと考えられる。例えば「共同祭祀」の場であったり、何らかの「再生産」の場であったのかもしれない。

もう一点、B地区第1号住居跡と第1号集石跡の関係であるが、前章でも述べたように第1号集石跡からは多くの石器類と剝片が出土している。石器を古代人はどこで作ったのかという疑問について、一つは河原で作ったという考え方ともう一つは集落へ持ち帰って（原石を）作ったという考え方がある。（註2・3）当遺跡ではB地区南側に溝状構造が存在し（旧小河川とも考えられる）原石を手に入れるにはたやすいことも考えれば、住居跡外の空き地で台石を置き、原石を敲打することによって石器を作成した場所として1号住と1号集石の関係を把握しておく。

石器については土器の总数より多く出土している。種別すると打製石斧・磨り石・敲打器が主体となり次に剝片石器が多く、残りは石錐・石鎌・石皿・凹石・棒状石器・磨製石器・石匙などで全般的に出土している。

なお、弥生時代の遺物として第20図37、第43図614の石器類と図版4の土器（若干疑問を感じるか）が出土しており大久保地籍に弥生時代の集落の存在の根拠が発見された成果であった。

住居跡の時期的変遷を考えると（A・B区同列として）、A地区1号住～3号住、B地区1号住～4号住の合計7軒の住居跡は曾利II式系、加曾利E II式系、唐草文系II～IIIの範囲に比定され大差はない。繩文時代中期後半の中の中間に設定できる。

特にB地区2号住は唐草文系・曾利式系の影響を受けた上伊那型の土器が注目され、第3号住では加曾利E式の影響を強く受けている。

以前から問題提起されている上伊那地域の繩文中期後半の土器の形態的・機能的分類を視点においた編年を早急に体系づけなければならないと痛感している。

（小原晃一）

第V章 出土土器についての一考察

前章でも述べたように上伊那地域の繩文中期後半の土器の形態的・機能的分類を視点においた編年体系が遅れている。このことはいまだかつて遺跡の分析、集落の分析・把握に多大な影響をおよぼしていると言える。

上伊那地域は現在県営は場整備事業などの広汎な土地整理が進み、数多くの遺跡が記録保存の名のもとに調査され、やがて二度と我々の眼前によみがえることはなく「破壊」されている。その担当者である著者も同じく「破壊者」の一員となってしまっている。

その「破壊」と裏腹に、数多くの貴重な歴史的文化遺産が出土し、原始・古代を解明すべく歴史的史料が蓄積されつづけている。我々研究者は、今こそより広い知識をもち広い視野に立脚して、それらの解明・位置付けを行なう責任と義務があると思う。

当遺跡より出土した土器と当地域より出土している重要な土器を考察し地域性を再検討したい。一つのタイプは口縁部が内傾し「く」の字状を呈し、口縁部に粘土ひもによる蛇行隆帯文を貼り付けその上に斜繩文をこらかし胴下半部には同様の斜繩文を施したものである。

第51図中1-B4、2、3-1、4-2がそれに当る。1-B4は器高21.3cm、口径15cm、胴径16.6cm、底径8.7cm、器壁厚8mm前後を測る。2は器壁厚7mm前後である。3-1は器壁厚6mm前後、4-2は現器高24cm、口径18.2cm、胴径14.8cm、器壁厚9mm前後である。住居跡の床面、床上及び覆土中から出土している。

資料検討の不足のため、これらの土器を中心に記述するという制約はあるが、3の南原遺跡をのぞいては駒ヶ根地域竜西に出土例が見られる。(竜東は未調査の部分が多い)

上記に挙げた土器はいずれも器壁厚が6~9mmと薄く、施文は斜繩文と蛇行隆帯文にしばられる(1-B4はさらに蛇行隆帯文の下に粘土ひもを指頭押圧している)。器形は壺形かキャリバーフormを呈し、表面には「すす」が裏面には「おこげ」が付着している。伴出土器は曾利系、唐草文系、加曾利E系の土器が出土している。

これらのことより当タイプは加曾利E系、大木式系の影響を受けているが上伊那地域独自の土器として繩文中期後半の中の中間に位置付けられ、「煮沸用」の土器として機能は考えられる。7-8、11、3-8、8-14も当タイプに近似し同様の性格をもつと考えられる。

当タイプの土器の初源・清長については明確に解からないが、8(南原遺跡)-1・3・4に初源は求められるかもしれない。8-3については関西系船元式に比定され(註4)、8-4は井戸尻II式に比定され(註5)と報告されているが、当タイプと器形が異なるので再検討を要すし、関東・東北系の土器の中にその初源は存在する可能性が高い。

もう一つのタイプは、第51図中下段左の一群で「馬蹄状突起付土器」と呼ばれ、駒ヶ根竜西地域に分布が見られる。口縁部に沿って2単位及び4単位の馬蹄状の突起を装飾し孔を口縁に並行又は垂直に穿がっている。円筒形を呈し、地文に斜繩文を施し沈線で蛇行文・懸垂文をつけている。4-1、5-15、7-36、8-8、9-33がそれに当る。全体的な器形が判る土器は出土していないが、9-33と8-8をプラスした形となると考えられる。器形は大型で口径40cm前後、推定器高60cm前後、胴径30cm前後を測ると思われる。用途・機能については判明しがたいが、8-8は住居跡床面南壁寄に底部穿孔の伏甕として使用されていた。一つをもって全体を推測することは矛盾を生じるので現在の所論はさけたい。

前記のタイプ同様加曾利E系、大木式系の影響を受けた上伊那型の土器として位置づけられる。

(小原晃一)

(註1) 中部高地繩文土器集成グループ 1979 「中部高地繩文土器集成 第1集」

(註2) 田中清文 1982 「繩文の道」8P 「伊那路」第26巻第5号 上伊那郷土研究会

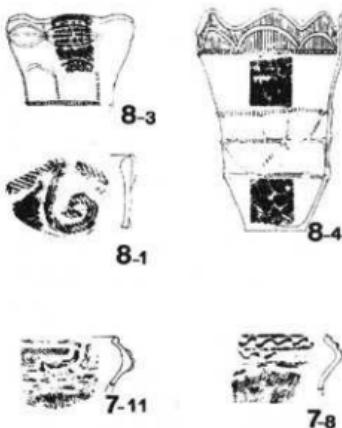
(註3) 駒ヶ根市教育委員会 1977 「南原一緊急発掘調査報告書」84P

(註4) " " 21P

(註5) " " 24P



大久保北遺跡周辺関係遺跡分布図



1. 大久保北 2. 横前新田 3. 滝ヶ原 4. 日向坂 5. 七免川B 6. 原垣外 7. 丸山南 8. 南原
9. 大城林 (図中1-B 4は大久保北遺跡-B地区第4号住居跡出土、8-14は南原遺跡一土壤14号出土、7-36は丸山南遺跡-第36号住居跡出土、外も同様に意味する)

第51図 大久保北遺跡出土土器及び周辺遺跡出土土器相關図

図 版



1 調査 A 区調査前近景

2 第1~3住、1・2号土塙

3 第2住

4 第2住遺物出土状態

5 第1住埋甕

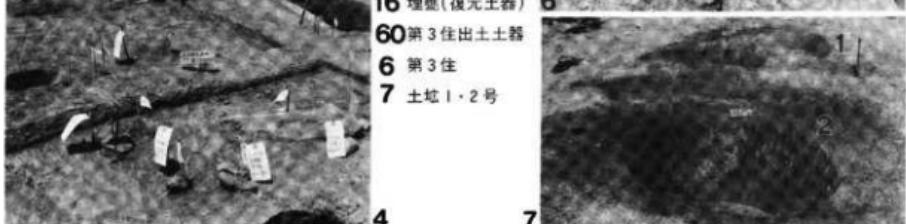
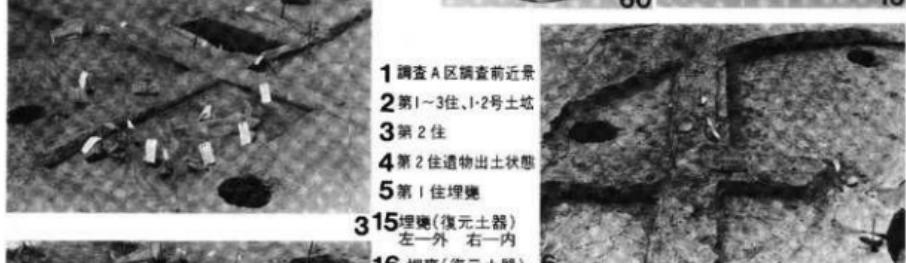
3 15 埋甕(復元土器)
左一外 右一内

16 埋甕(復元土器)

60 第3住出土土器

6 第3住

7 土塙 1・2号





1



378



383



2

1 調査 B 区全景

2 第 I-3 住第 I 号集石跡

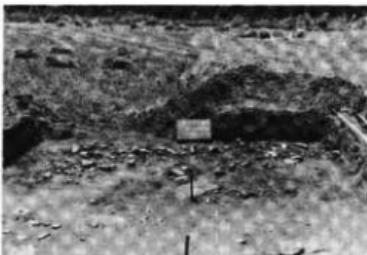
3 第 I 号集石跡

4 遺物出土状態

5 第 I 住

6 調査風景

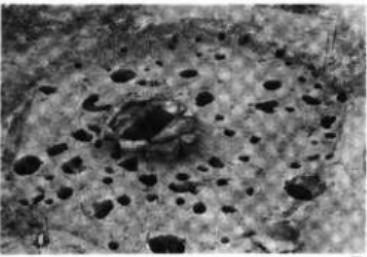
7 調査風景



3



4



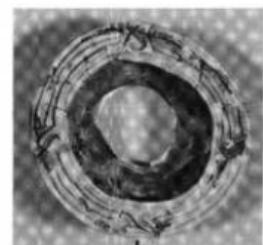
5



6



7

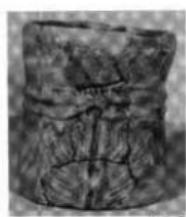


1 調査B区第2住遺物出土状態

2 // 第2住

48 第2住出土土器

113 391



168



258



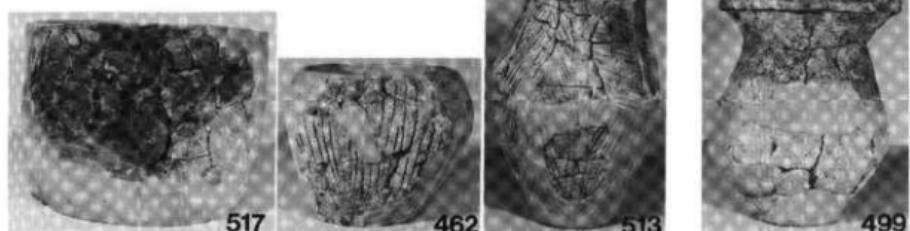
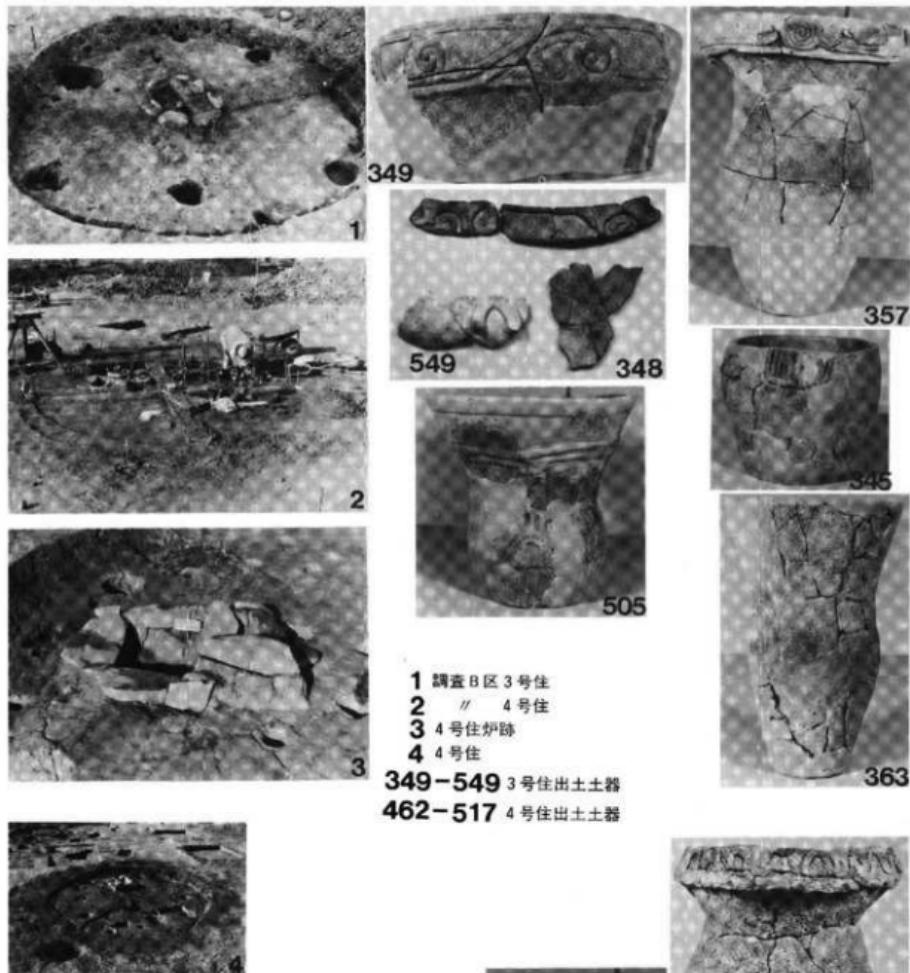
226



107



391

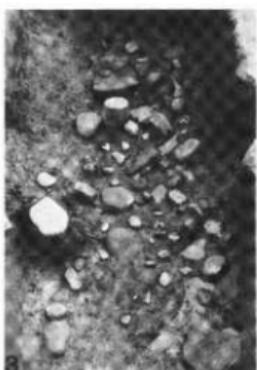




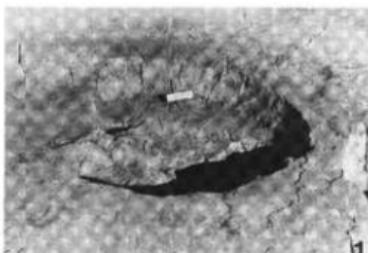
48



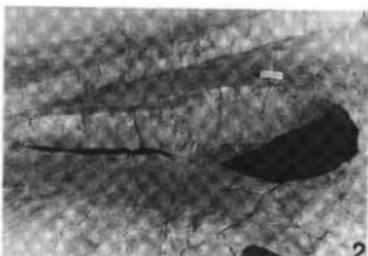
636



8



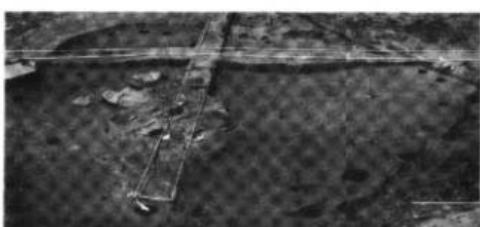
1



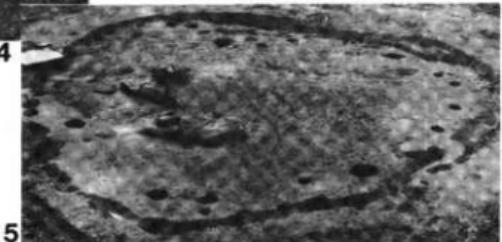
2



6



4



5

- 1 調査 B 区土塙 1 号
2 // 土塙 2 号
3 // 溝状遺構
4 調査 C 区第 1 住遺物出土状態
5 // 第 1 住
6 大久保北遺跡発掘參加者
48 ～42G 出土土器
636 第 2 号集石跡周辺出土土器

大久保北遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和57年3月20日 印刷

昭和57年3月25日 発行

編集 茅ヶ根市上穂南2-15市立茅ヶ根博物館内

県営ほ場整備事業茅ヶ根東部地区

埋蔵文化財調査会

発行 伊那市青木町伊那合同庁舎内

南信土地改良事務所

茅ヶ根市赤須町20-1

茅ヶ根市教育委員会

印刷 伊那市美尾下川手

株式会社 小松総合印刷所